

休眠預金活用事業・2020年度通常枠・草の根活動支援事業・全国ブロック

Higashiomi Unnan Nanto

Consortium HUN

*just because it's small
what you can see, understand, and achieve*

ローカルな総働で孤立した人と地域をつなぐ
事業報告書 2020-2023年度

ローカルな総働で孤立した人と地域をつなぐ 事業報告書

p.1	ごあいさつ
p.2	休眠預金活用事業 草の根活動支援事業
p.4	資金分配団体
p.6	2020-2023年度「ローカルな総働で孤立した人と地域をつなぐ」事業
p.8	実行団体
p.10	01 一般社団法人TeamNorishiro
p.16	02 NPO法人愛のまちエコ倶楽部
p.20	03 一般社団法人湖東まちづくり
p.24	04 産前産後ケアはぐ
p.28	05 一般社団法人みかた麴杜
p.32	06 うんなん多文化共生まちづくり協議会
p.36	07 3C「夢」Club実行委員会
p.40	08 なんとおせっ会 移住応援団
p.44	09 テラまちコネクト
p.48	10 社会福祉法人マーシ園
p.52	11 株式会社ガラバゴス
p.56	知の構造化
	01 プログラムオフィサーの学び合いによる効果
p.57	02 実行団体の学び合いによる効果
p.58	03 プログラムオフィサーの活動内容
p.60	04 地域総働体制の構築のプロセス
p.61	インプット

*just because it's small
what you can see, understand, and achieve*

ごあいさつ

このたびは、事業報告書をお読みいただき、心から感謝申し上げます。

地方市域では、人口減少や超高齢化、若者の流出、世帯の小規模化・単身化、地域産業の衰退などが進み、家族や地域社会の支え合いが弱まっています。これにより、引きこもり、障がい、出産・子育て、移住などの問題が複雑化・複合化し、個人や世帯が孤立し、深刻な課題が生じています。

この状況を変えるために、「複雑化・複合化した社会課題はローカルアクションでしか解決できない」という合言葉に基づき、東近江三方よし基金、うんなんコミュニティ財団、南砺幸せ未来基金の3つのコミュニティ財団が連携しました。

本報告書は、3つのコミュニティ財団がコンソーシアムを組んで、「休眠預金活用事業・2020年度通常枠・草の根活動支援事業・全国ブロック」の資金分配団体としてチャレンジした事業活動や成果、目標達成の状況を報告するために作成したものです。

私たちは、「社会的孤立者の病理は、本人ではなく社会にある」という認識で、本事業では、単一の団体ではなく、異なる強みを持つ主体が連携し、地域全体で孤立した人々と地域をつなげ支える活動を支援してきました。2020年12月から2023年2月までの間、11の実行団体が社会的孤立者と手をつなぎ、その手を握り続け、地域とつなぐための総合的な取り組みを行いました。皆様のご支援とご協力のおかげで、私たちの事業は多くの成果を上げることができました。

本報告書を通じて、助成先である一般財団法人日本民間公益活動連携機構(JANPIA)様に心より感謝申し上げます。JANPIA様のご支援とご協力により、私たちの取り組みが実現し、成果を上げることができました。

今後も、私たちは地域内外の皆様との連携を強化し、より多くの人々が支え合いながら幸せな暮らしを送れる持続可能な地域社会の実現に向けて努力してまいります。引き続き、皆様のご支援とご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

2023年7月

コンソーシアムHUNプログラムオフィサー 一同

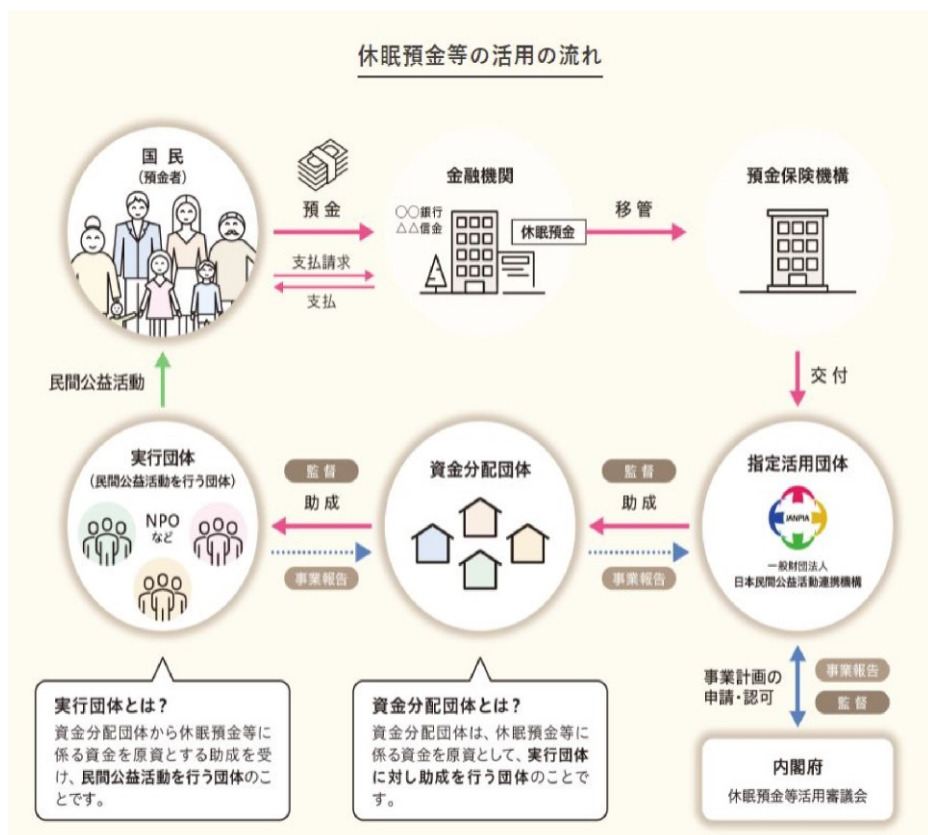
休眠預金活用事業 草の根活動支援事業

事業目的

地域に根差して従来から事業を展開しているNPOや各種団体を念頭に、休眠預金を活用し、さらなる活動の拡大及び成果の向上を図り、当該活動の持続可能性の向上につなげていくことを目的とした事業です。

休眠預金の活用

「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」(休眠預金等活用法)に基づき、2009年1月1日以降の取引から10年以上、その後の取引のない預金等(休眠預金等)を社会課題の解決や民間公益活動の促進のために活用する制度が2019年度から始まりました。休眠預金の活用の流れは下図のとおりです。



出典: JANPIAホームページ

休眠預金を活用して優先的に解決すべき社会課題

休眠預金等活用法に掲げられた3つの公益に資する活動に基づいて、以下の8つの項目を「優先的に解決すべき社会課題」とし、優先的に取り組みます。資金分配団体の「包括的な支援プログラム」に沿って実行団体が活動することで、その解決を目指します。

子ども及び若者の支援に係る活動

- (1) 経済的困窮など、家庭内に課題を抱える子どもの支援
- (2) 日常生活や成長に困難を抱える子どもと若者の育成支援
- (3) 社会的課題の解決を担う若者の能力開発支援

日常生活または社会生活を営む上での 困難を有する者の支援に関する活動

- (4) 働くことが困難な人への支援
- (5) 孤独・孤立や社会的差別の解消に向けた支援
- (6) 女性の経済的自立への支援

地域社会における活力の低下その他の社会的に 困難な状況に直面している地域の支援に関する活動

- (7) 地域の働く場づくりや地域活性化などの課題解決に向けた取組の支援
- (8) 安心・安全に暮らせるコミュニティづくりへの支援



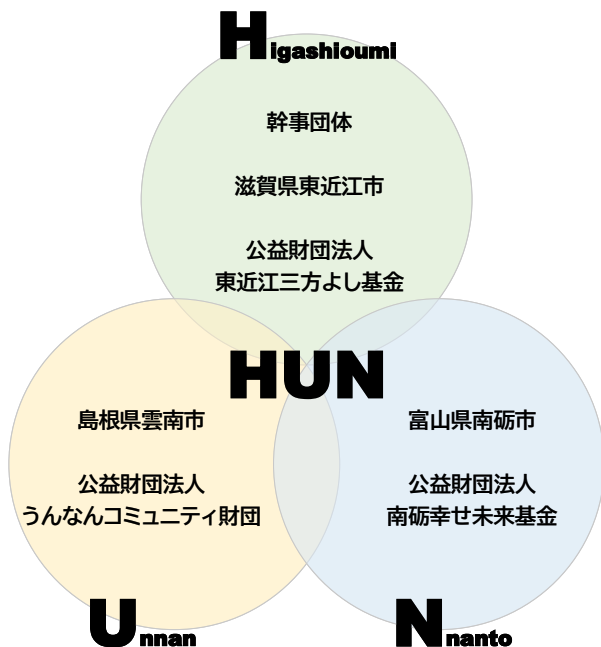
資金分配団体

コンソーシアムの構成

本事業では、「複雑化・複合化した社会課題はローカルアクションでしか解決できない。」を合言葉に集った市域を対象エリアとする3つのコミュニティ財団(東近江三方よし基金、うんなんコミュニティ財団、南砺幸せ未来基金)がコンソーシアムを組み、休眠預金活用草の根活動支援事業(全国枠)の資金分配団体にチャレンジしました。

これら3つのコミュニティ財団は以下の3つの共通点を持っています。

- 人口減少や少子高齢化が著しく進行しているローカルシティであること。
- 小規模多機能自治組織の取り組みが活発であること。
- コミュニティ財団と連携する民間公益活動を応援する中間支援組織があること。



各コミュニティ財団と市域の概要

各コミュニティ財団と市域の概要は下表のとおりです。

■公益財団法人東近江三方よし基金

団体概要	一般財団法人設立年月	2017年6月
	公益財団法人化年月	2018年7月
	住 所	滋賀県東近江市八日市本町9-19
	URL	https://3poyoshi.com/
市概要	面 積	388.37平方キロメートル
	人 口	112,251人(2023.6.1)
	世帯数	46,771世帯(2023.6.1)
	高齢化率	27.25%(2023.6.1)

HP⇒



■公益財団法人うんなんコミュニティ財団

団体概要	一般財団法人設立年月	2020年4月
	公益財団法人化年月	2020年10月
	住 所	島根県雲南市木次町木次36 三日市ラボ
	URL	https://www.unnan-cf.org/
市概要	面 積	553.18平方キロメートル
	人 口	35,403人(2023.5.31)
	世帯数	13,609世帯(2023.5.31)
	高齢化率	40.49%(2023.5.31)

HP⇒



■公益財団法人南砺幸せ未来基金

団体概要	一般財団法人設立年月	2019年2月
	公益財団法人化年月	2019年12月
	住 所	富山県南砺市山見1739番地2 井波コミュニティプラザ「アスモ」2F
	URL	https://www.nantokikin.org/
市概要	面 積	668.64平方キロメートル
	人 口	47,290人(2023.5.31)
	世帯数	17,509世帯(2023.5.31)
	高齢化率	39.44%(2023.5.31)

HP⇒



2020-2023年度「ローカルな総働で孤立した人と地域をつなぐ」事業

事業概要

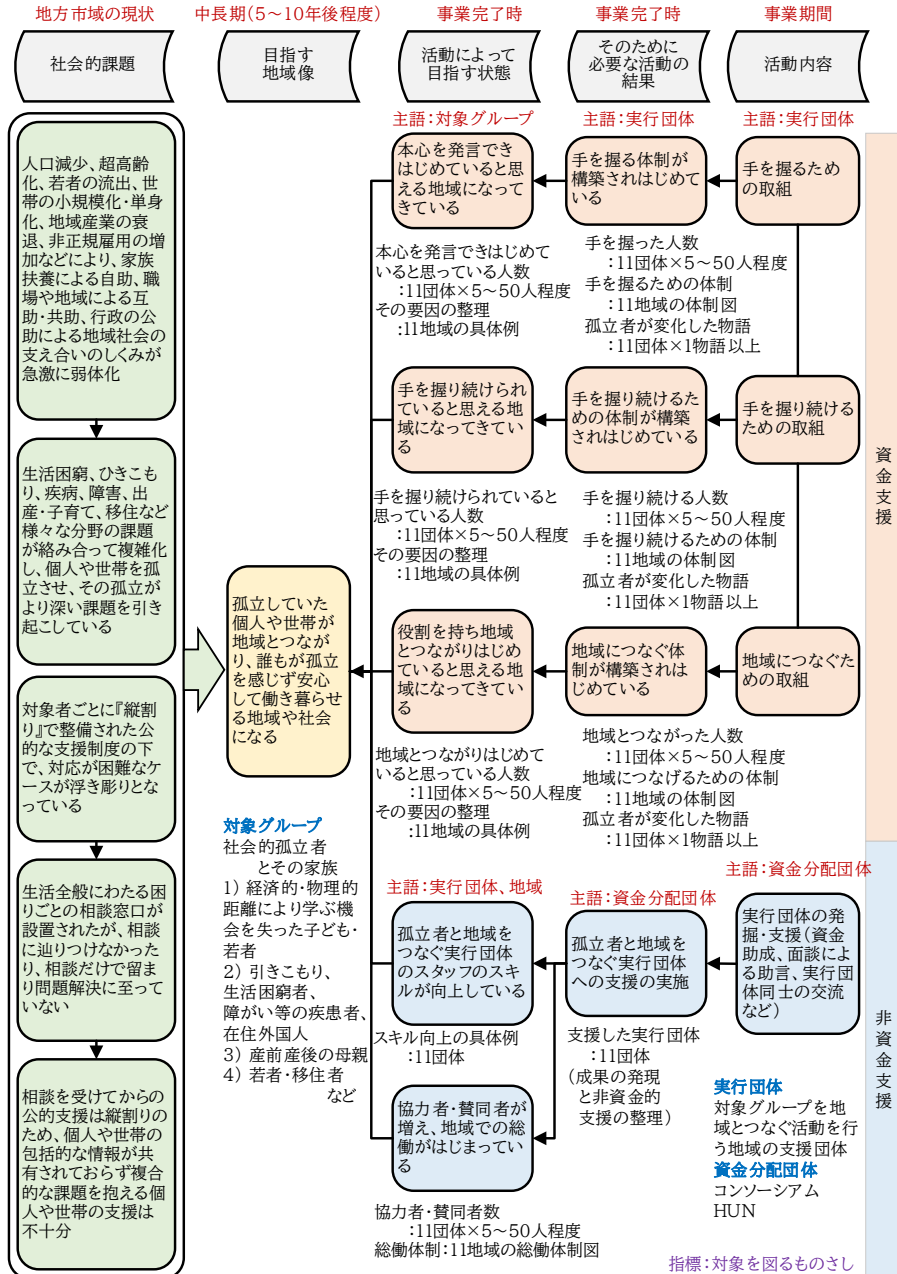
地方都市では、人口が減少し、高齢化や若者の流出、家族の小規模化・単身化、地域産業の衰退などの問題が起きています。これにより、地域社会の絆が薄れ、生活に困難を抱えた人や引きこもりの人、障がいを持つ人、出産や子育てに悩む人、移住者など、さまざまな分野で課題が絡み合っています。このような状況を改善するために、単独の組織ではなく、様々な人や団体が協力して地域全体で問題解決に取り組む活動を支援しました。具体的な支援内容は、学びの機会を失った子どもや若者に教育と心のケアを提供する活動、引きこもりや障がいのある人、在住外国人を地域に参加させてサポートする活動、孤立している人々の交流の場を作る活動、若者や移住者が働いたり起業したりして地域とつながる支援活動などです。これにより、既存の組織の総合的な支援体制を整え、社会的孤立者が地域とのつながりを感じられ、安心して暮らせる地域を目指しました。また、コンソーシアムによる事業の成果を構造化し、市域レベルのコミュニティ財団などに活用できるようにしました。

事業の経過



2020年	●	12月	HUN事業開始(18日) 実行団体公募開始(21日)
2021年	●	01月	実行団体公募締め切り(24日)
	●	02月	実行団体選考会
	●	03月	実行団体事業開始
2022年	●	04月	HUN中間評価報告
2023年	●	02月	実行団体事業終了(28日)
	●	07月	HUN事業報告会(10日) HUN事業終了(31日)
	●	08月	HUN事後評価、完了報告、精算報告

事業概要図



資金支援

非資金支援

指標：対象を図るものさし

実行団体

実行団体一覧

本事業では11の実行団体を選定して、伴走支援を行いました。各実行団体の団体名、事業名、対象とする社会的孤立者は下表のとおりです。

市名	番号	実行団体名	事業名	対象とする社会的孤立者	助成額(円)
東近江市	1	一般社団法人TeamNorishiro	「空き家を活用して命を守りつなぐ場づくり」事業	福祉制度を利用できない生きづらさをかかえる人/障がい福祉部門で働く若者	12,000,000
	2	NPO法人愛のまちエコ倶楽部	総協で地域につなぐ移住者支援拠点づくり	移住希望者・移住者	12,900,000
	3	一般社団法人湖東まちづくり	「みんなで走らす湖東のバス企画」事業	交通弱者（学生、高齢者）	7,000,000
雲南市	4	産前産後ケアはぐ	地域みんなで産前産後・子育てを応援	孤立している産前産後の女性	7,433,084
	5	一般社団法人みかた麴社	地域の応援者を増やして、みらいのかのうせいをもっとたかめよう！	学校での学びづらさや過ごしづらさを抱えている子（発達障害を持つ子どもたち）	10,080,000
	6	うんなん多文化共生まちづくり協議会	外国人住民のためのうんなん暮らし支援事業	孤立している在住外国人	5,926,291
	7	3C「夢」Club実行委員会	個性を育む創造プロジェクト	特別支援学級に所属しているこどもたち/不登校の児童・生徒/経済的に困難な家庭のこどもたち(就学前～高校生)とその保護者	8,037,372
南砺市	8	なんとおせつ会 移住応援団	空き家対策・移住・定住促進事業	移住希望者、Uターン希望者/持ち家の継承に悩む一人暮らしの高齢者	5,036,032
	9	テラまちコネクト	お寺初！ おかささん目線の雇用創出事業	子育て中で働く場がない女性	6,754,899
	10	社会福祉法人マーシ園	引きこもりや精神障害があり孤立状態の人に社会参加の環境を創る	引きこもりの方、孤立する精神障害のある人	4,857,533
	11	株式会社ガラパゴス	桜ヶ池キャンプ場 ～キャンプ場における事業で、ひきこもりと障がい者の方を雇用することにより社会につなげる～	引きこもりの方、福祉作業所の利用者	7,120,192

助成額:2023.6.17時点の月次報告書 確定助成額

実行団体の成果報告と本事業のアウトプット、アウトカムの関係

各実行団体の成果報告の項目と本事業のアウトプット、アウトカムの関係は、下表のとおりです。

頁数	記載内容	アウトプット、アウトカムの関係
1頁目	実行団体名 事業名 助成額 対象とする社会的孤立者 事業概要 活動写真	—
2頁目	体制とつながった対象者の人数	【資金的支援アウトプット】 手を握る、握り続ける、地域につなげる 体制図と人数 【資金的支援アウトカム】 本心が発言できはじめている、手を握り続けられている、地域につながっていると思っている人の人数
	総働体制図	【非資金的支援アウトカム】 総働体制図(協力者・賛同者数)
3頁目	対象者のつながり図	【資金的支援アウトプット】 孤立者が変化した物語
4頁目	対象者が変化した物語	【資金的支援アウトプット】 孤立者が変化した物語
	成功した要因	【資金的支援アウトカム】 本心が発言できはじめている、手を握り続けられている、地域につながっていると思っている人が増えた成功の要因
	主な非資金的支援の内容	【非資金的支援アウトプット】 非資金的支援の内容の整理
	非資金的支援によりスタッフが向上したスキル	【非資金的支援アウトカム】 向上したスキルの具体例
	波及的・副次的効果	【非資金的支援アウトプット】 成果の発現の整理



「空き家を活用して命を守りつなぐ場づくり」事業

助成額12,000千円

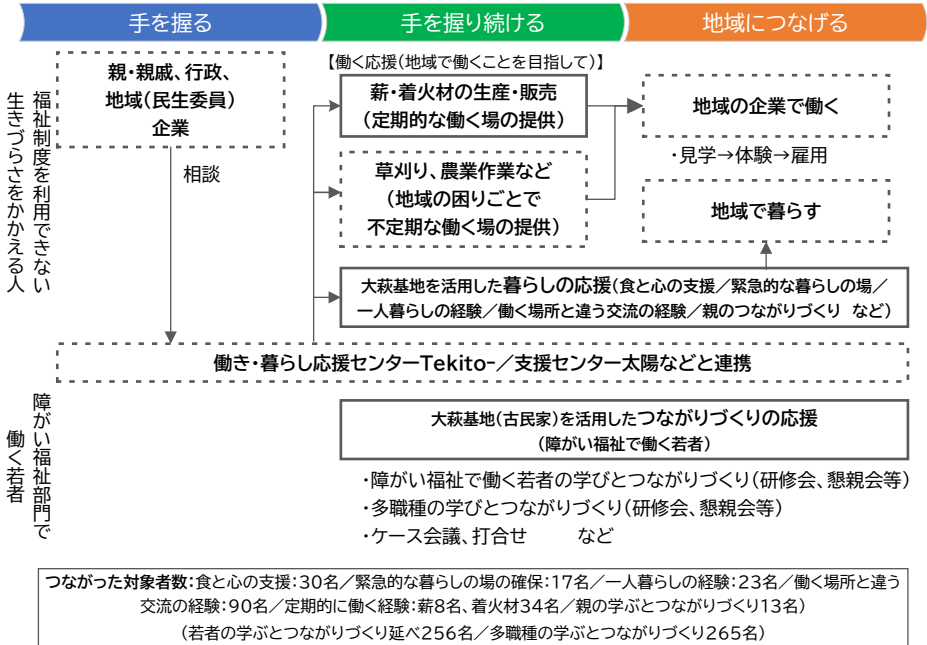
対象とする社会的孤立者:福祉制度を利用できない生きづらさをかかえる人/
障がい福祉部門で働く若者

現行の福祉制度を利用できない、もしくは利用が難しい引きこもり状態にある若者や、障がいのある人(愛を持って「働きもん」という)にとって、緊急時の情報発信場所や、将来の生活を築くための訓練機会や場所が地域には存在しません。同様に、彼らを支援する障がい福祉や支援の現場で働く若者が学び合える場所や、多職種の人々との交流機会もありません。その結果、地域全体で障がい福祉の現状を理解し、対応する広がり皆無の状況となっています。このような現状において、私たちは空き家である「大萩基地」を利用して、働きもんが緊急時に利用しやすい避難場所を設け、彼らが地域で成長するための経験を積むことができる場所である「暮らしの応援の場」を提供し始めました。また、地域の多様な人々に対して障がい福祉について理解を深める機会を提供し、彼らを支援するための応援団を増やすことで、さまざまな困難を乗り越えるための地域全体の力を大いに高めることを目指しています。これにより、彼らの暮らしや働きをサポートし、地域全体の活力を高められる地域になり始めました。



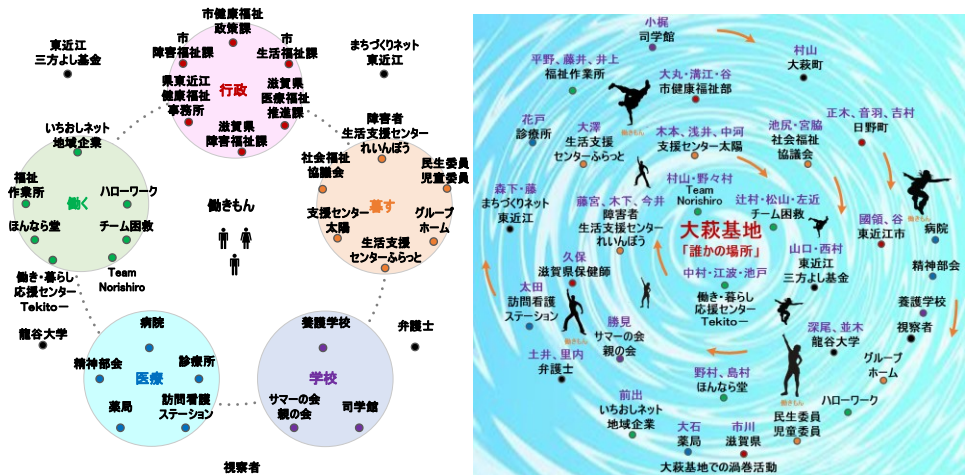
1. アメーバー的な現象で主催者不明。人同士が声をかけ合い、自由な雰囲気。目的や目標ではなく、人に人が集まることを学ぶ。
2. 東近江市中間的就労支援の勉強会。制度では手を握れない人たちの手を握りに行くことの大事を共感する面々が機関を超えて集まる。
3. 大萩基地で働きもんと一緒に梅干し作業。長年、人と関わることを避けてきた男性が、目指していたのは料理人であることを告白する。作業後は、地域の応援団ご夫婦から手づくりのおにぎりとおみそ汁の差し入れ、重要で奇跡的な時間。一緒に作業した人だからこそ初対面でも一緒ににおにぎりを食べられる、場所の重要性を再認識。
4. 男子が夏に大萩基地で宿泊体験。自宅以外での宿泊は小学生以来。静かない泊でワーカーと鍋をつくり共に食べる。誰かと食べる意味を学ぶ。翌朝、雑炊をつくりながら自分らしく過ごす時間を重ねる。

■体制とつながった対象者の人数



■総動体制図

制度に縛られない、大萩基地での様々な活動が、渦巻の中心となり、「巻き込み力」の強いパワーと「巻き込まれ力」の柔らかなパワーで、「制度世界」が「ごちゃまぜ世界」に変わりつつあります。そして、関係者は「組織の立場」から「個人」のつながりになってきました。



事業開始前 **制度世界**

- 組織の立場(担当者)
- 没個性
- 断続的
- 制度内での役割
- 専門性
- 部分的、機能的な人間関係
- 組織の獲得(利己)
- 孤立

事業完了時 **ごちゃまぜ世界**

- 個人
- 個性的
- 継続的
- 取組に合わせた役割
- 汎用性
- 全体的、包括的な人間関係
- 善意と内発性(利他)
- 連携

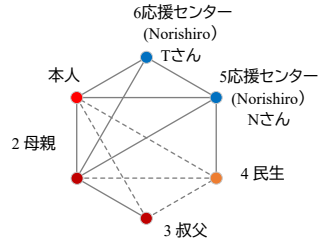
■対象者(福祉制度を利用できない生きづらさをかかえる人)のつながり図

手を握る

Norishiroと連携する働き・暮らし応援センターとつながる

民生委員さん、親戚の叔父さんから相談を受け、支援ワーカーN、Tが働きもん本人、母親とつながった。

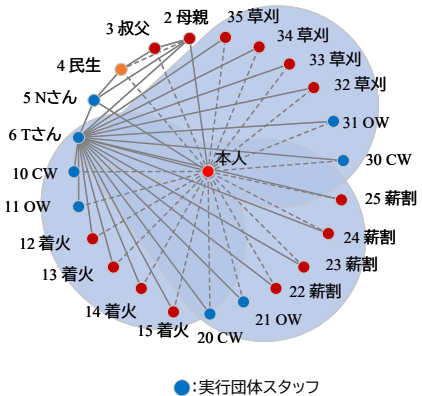
支援ワーカーTは働きもん、支援ワーカーNは母親の応援を担当した。



手を握り続ける

着火材づくり、薪割、草刈など働くを通して関係者とつなげる

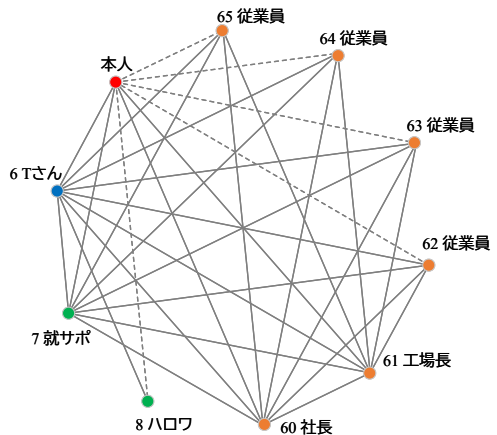
着火材づくり、薪割、草刈りなど、働くを通して、働き暮らし応援センターの支援ワーカー(CW)、ケースワーカー(OW)や、これらに参加する働きもんにつなげました。



地域につなげる

就労サポーター、ハローワーク、実習先の地域の企業(社長、工場長、従業員)の関係者につなげる

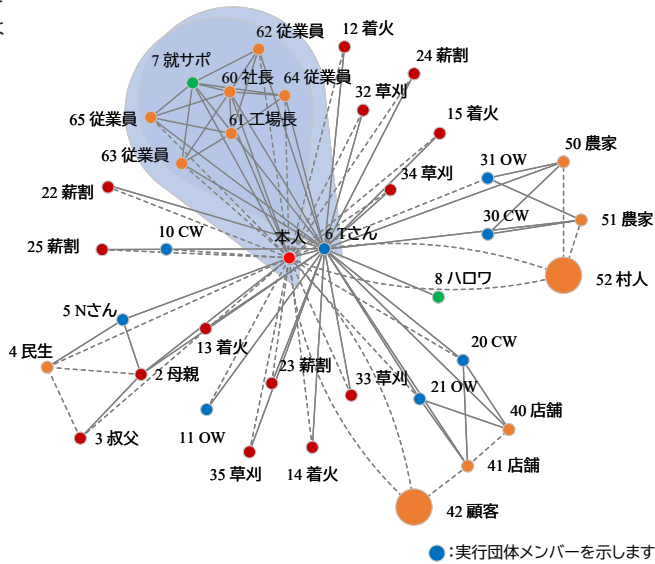
薪割、着火材づくり、草刈りなどで働くを通して、本人の得意、不得意、気持ちなどを支援ワーカーが見極め、就労サポーター、ハローワーク関係者と連携して、既に関係のある地域の企業に実習をつなげました。この過程を通して就労サポーター、ハローワーク、実習先の企業(社長、工場長、従業員)の関係者につなげました。



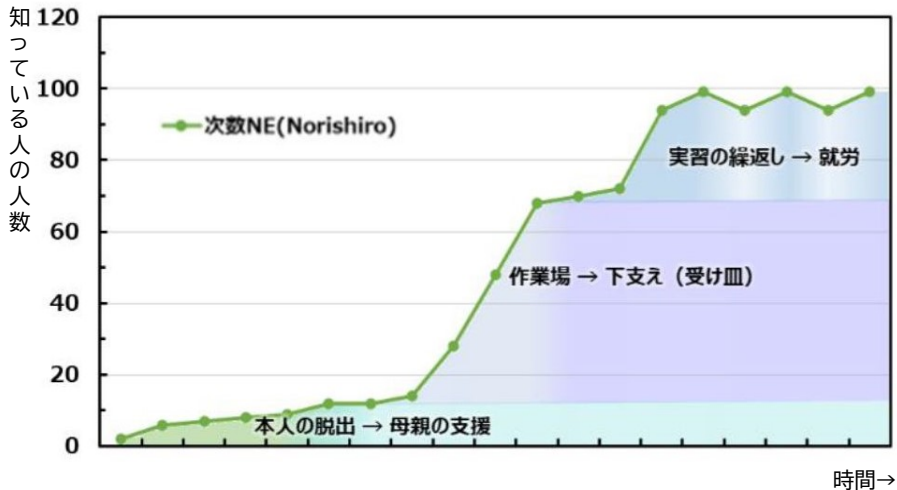
地域につなげる

企業に就職したあともこれまでの役割を変えて、つながり続ける

企業に就職したあとも、これまでの関係が切れないように、役割を変えて関係性を継続しています。



働きもんを知っている人(つなげた人)の変化



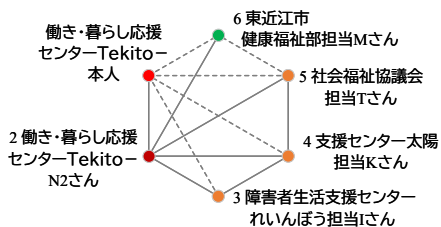
出典:Kyoto University Research Information Repository: ひきこもり支援のネットワーク分析 : (一社)Team Norishiroを事例として:加藤・野々村・西村・山口・広井 (kyoto-u.ac.jp)<<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/274738>>

■対象者(障がい福祉部門で働く若者)のつながり図

手を握る

担当する働きもののケース会議でつながる

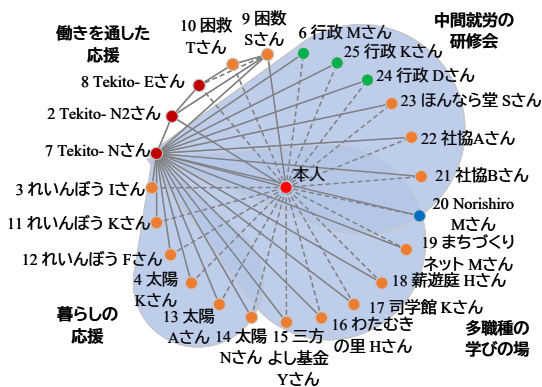
担当する働きもののケース会議、働きものの働き・暮らしの応援などの仕事等で、各連携団体の担当者とながりました。(あくまでも支援者の担当として、連携する団体の担当者とは知り合う)。



手を握り続ける

大萩基地での研修、懇親会などにより、個人としてつながる

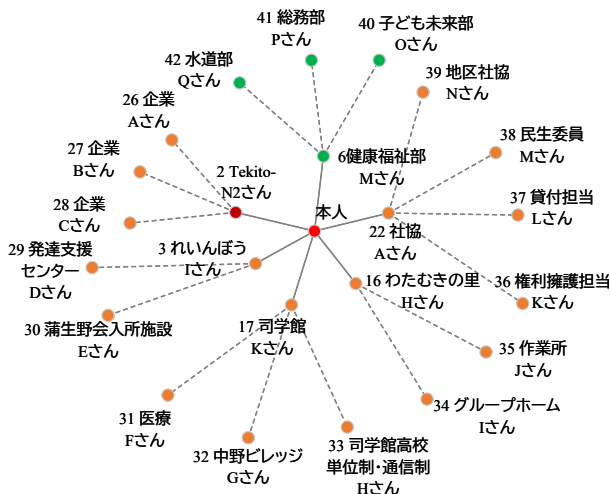
働きものの暮らしを応援する現場、大萩基地での中間就労の研修会や多職種との集い、懇親会などを通して、働きものを応援するという共通の目的のもと、連携団体の各個人としてつなげました。(連携団体の担当としてでなく、個人として知り合う場をつくりました)。



地域につなげる

個人のつながりを通して、その個人とつながる関係者につなげる

大萩基地でつながった関係団体の各個人を通して、働きものの働き・暮らしを応援するために必要な連携団体の個人とつなげました。



● : 実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語：一人暮らし体験 距離ができると大切さが分かる！

学生時代から何かとうまくいかなかった私。25歳の時に調子が悪くなり、その時から支援ワーカーさんが私の手を握り、私の気持ちを理解し支えてくれました。もうすぐ10年になります。作業所で働きながら、余暇にはハイキングを楽しんでいます。最近では昼間の大萩基地を訪れるなど、さまざまな経験を積んできました。そして今回、大きな経験となる独りでの泊まりをしました。家族や支援者もいない夜を過ごすことになりました。「アパートではなく民家で泊まること」を試してみたいと思ったのは、田舎で育った私にとってアパートよりもハードルが低いものでした。この経験を通じて、自分の時間を大切にすることの重要性に気づきました。普段は考えない家族や作業所のことが頭に浮かびました。距離ができるとその大切さが分かるのです。

■成功した要因

- 私たちは突然新たな活動を始めたわけではありません。これまでの連携の基盤があり、現場のニーズを把握し、現在の活動の延長線上で開始したことが成功の鍵です。ですから、場所や居場所を整備するだけでは何も始まらないのは当然のこと。
- 最初の1年間は、働き・暮らしセンターを利用することに重点を置いていました。1年目の利用事例を普及させたことで、2年目からは精神障害者の生活支援を行う「支援センター太陽」や障害者生活支援を行う「支援センターれいんぼう」での働きものの暮らしを応援するための利用も始まったこと。
- さらに、東近江市の中間的就労支援共同体との連携により、障害福祉で働く若者の研修会や東近江三方よし基金による多職種の研修の場が提供されるようになり、障害福祉で働く若者や多職種の連携を促進するための交流会などにも利用が広がったこと。

■主な非資金的支援の内容

- 事業のロジックモデルの作成や評価の検討についての支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 活動成果の見える化のスキルの向上。

■波及的・副次的効果

- いままでには働くアイテムしかなかったが、暮らしのアイテムを得ることができたこと。
- グループホームでの働きもんがひとり暮らしの体験をする場所として活用できたこと。
- ひとり暮らしの体験をする場所を視察できることで、働きものの親の安心感が向上したこと。
- 若い世代の親をつなぐために、働き・暮らし応援センターと支援センター太陽を通じて親同士をつなぐ取り組みが行われたこと。
- 大萩基地でのワーカー会議は、制度に縛られない応援の話ができ、会議の内容が向上していたこと。
- 制限のない利用条件により、働きものの応援が最適化されたこと。
- 大萩基地での体験により、若いワーカーの能力が向上したこと。
- 大萩基地の利用により、地域への受け入れがスムーズに行われたこと。
- 働き・暮らし応援センターは、この場所があることによって、支援センターれいんぼうや太陽との連携が深くでき、本来の働き・暮らしの応援ができるようになってきたこと。それは特に支援ワーカーにとって一番大きい。
- 制度に縛られない、大萩基地でのさまざまな活動が、「制度世界」が「ごちゃまぜ世界」に変わりつつあり、関係者は「組織の立場」から「個人」のつながりになってきたこと。



総働で地域につなぐ移住者支援拠点づくり

助成額12,900千円

対象とする社会的孤立者：移住希望者・移住者

人口減少に伴う地域の脆弱化の中で、意図的に地方を選ぶ移住者は、将来の社会ビジョンを持つ貴重な人材です。しかしながら、行政支援には移住者と地域を結びつけるための適切な手段が不足しており、結果としてミスマッチや孤立が生じています。そこで、このプロジェクトでは、空き家を活用した交流拠点「だれんち」を創設し、移住者と地域、また移住者同士の交流を促進することで、移住者の「暮らす・働く」価値観を具体化し、地域の中で活躍できる支援体制を構築しました。



1. 移住ツアー（地域のお母さんたちがつくった夕食をみんなで囲み、参加者と交流）
2. マルシェ『だれんちの縁側日和』（まだ顔を合わせていない移住者＆新規就農者が自然に集える場づくり）
3. ワークショップ『おむすびの会』（共感や繋がりを生むためのワークショップ）
4. 大学と移住者のコラボ商品開発（大学連携で、地域の生業づくりに外からの視点や柔軟な発想を取り入れる）
5. だれんち

■体制とつながった対象者の人数

手を握る

手を握り続ける

地域につなげる

だれんち(拠点施設、Instagram)(2022.9オープン)

相談、施設の見学・体験(随時)

農業プログラム(9プログラム)

お試しステイ(5回)

交流プログラム(10プログラム)

- ・東近江市移住ツアー
- ・滋賀県お試し移住
- ・大学ゼミ合宿 など

生業ラボ(飲食や食品加工、販売の試行)

- ・ワンデিশェフ
- ・マルシェしこみ など

企業・大学の合宿の誘致

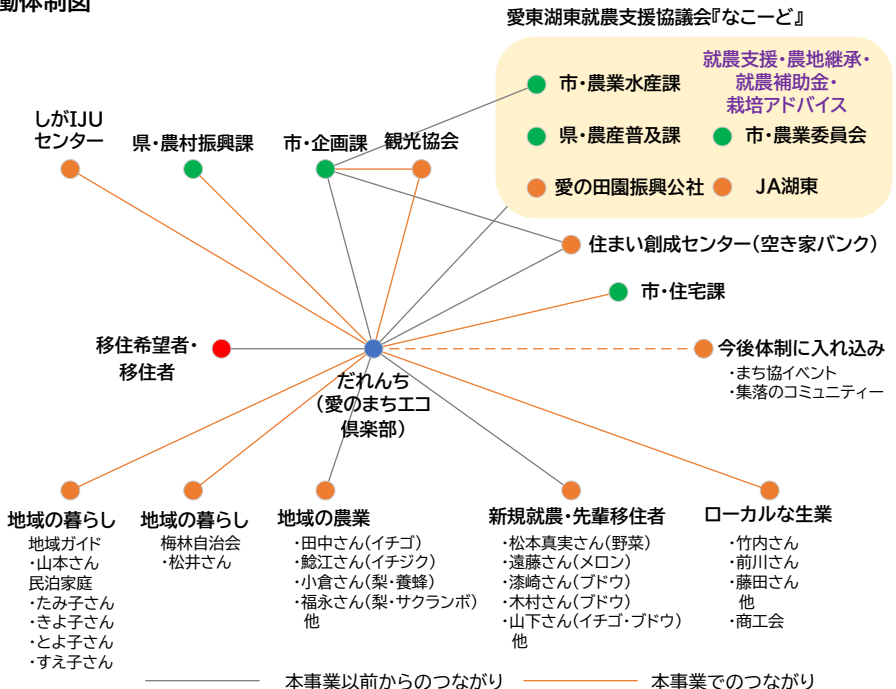
- ・地域資源の生業づくりをテーマにした合宿やシェアオフィスの場の提供

講座やワークショップ(23回)

- ・「暮らし・働き方」をテーマにした講座やワークショップ

つながった対象者数:『お試しステイ』の利用者数34人、農業・地域交流プログラム参加者58人
生業ラボ利用者件数8件、企業・大学サポート3大学、講座やワークショップ参加者294人

■総働体制図

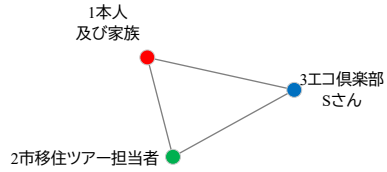


■対象者のつながり図

手を握る

エコ倶楽部とつながる

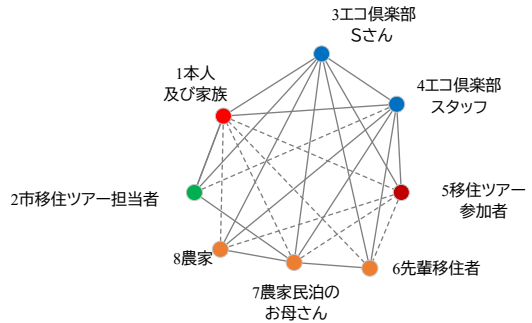
市移住ツアーに申し込み、エコ倶楽部とつながりました。



手を握り続ける

移住ツアーでスタッフや地域の方につなげる

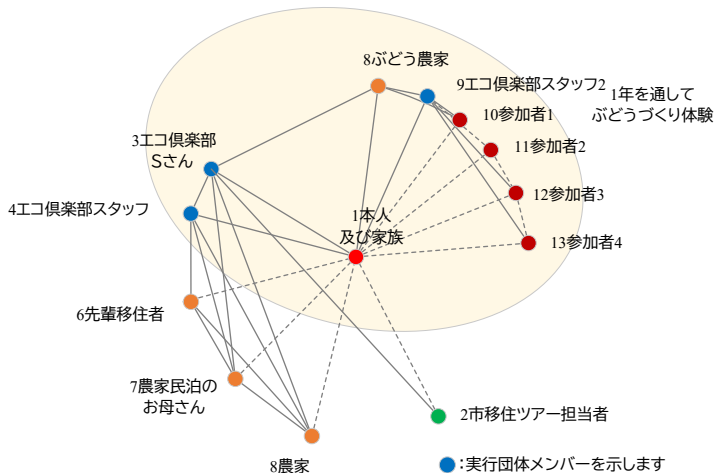
移住ツアーでスタッフ、地域の農家、農家民泊のお母さん、先輩移住者など地域の方につなげました。



地域につなげる

1年を通した農業体験等により地域につなげる

移住ツアーをきっかけに農業体験に参加し、栽培指導をする農家やスタッフ、参加者、そして移住ツアーで知り合った人々など、地域の方々につなげました。



■対象者が変化した物語:移住を夢見て！

農村移住に興味のある私は、東近江市が主催する移住ツアーに参加しました。ツアーでは、農業体験や地域の農家の話を聞く機会を得ました。特に「だれんち」という農家民泊で、お母さんたちがつくる田舎料理を楽しみながら、リラックスした雰囲気の中で地域の話し合いに参加しました。この中で、地域のお母さんたちとの交流を深め、地域の魅力を実感することができました。このツアーを通じて、私は東近江に興味を持ちました。現時点ではまだ移住には至っていませんが、私は1年間の農業体験プログラムであるぶどう倶楽部に参加し、積極的にブドウ栽培に取り組んでいます。

■成功した要因

- 菜の花館を拠点にして、菜の花エコプロジェクトや年間を通じた農業体験、農泊、新規就農者の移住支援など、これまでの活動経験があったこと。
- これらの活動によって築かれた人々や団体とのつながりが強固に確立されていたこと。
- これまでの活動において、社会課題として取り上げてきた「地域とのつなぐ支援の空白」「地域と関係性を創る滞在拠点の不在」「移居前から後の包括的な支援の必要性」という3つの課題に対して、滞在拠点の創設によって対応できることを、これまでの経験から想定していたこと。
- 移住支援では、従来は各団体が個別に案内していましたが、「だれんち？」という地域との関係性を築く場が生まれ、移居前からのつながりが生まれ始めたこと。移住希望者は「だれだれさん」という具体的な顔を思い浮かべ、地域の関心も高まっています。これにより、移住者と地域の意識が変化し、共に暮らす一員としての安心感が生まれてきたこと。この変化は、移住者と支援者の双方にとって重要です。

■主な非資金的支援の内容

- 事業のロジックモデルの作成や評価の検討についての支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 活動成果の見える化のスキルの向上。

■波及的・副次的効果

- 地域のお母さんたちに新たな活躍の場が生まれ、移住希望者との交流を通じて地域の情報を共有し、相乗効果をもたらしたこと。
- 空き家の活用により、集落の安心感が高まったこと。
- 受け入れ側の農家は自身の仕事の価値を再認識し、受入農家のイメージも向上したこと。
- レンタルキッチン需要が増えており、起業やマルシェ向けの活動が活発化したこと。
- 共に食べることを通じて人々が繋がり、安心感を感じる機会が提供されたこと。
- 大学生のローカルな働き方のイメージが変化し、地域への関心が高まったこと。
- 場の担い手となるパートナーが生まれ、さまざまな活動が展開されたこと。
- 子どもと集まれる場所の需要があり、子育て世代にとって魅力的な場所となったこと。
- 新しい拠点『だれんち』の発信効果により、若い世代へのPRが増えたこと。
- 「場」による事業PR機会が増え、商工会などの団体との連携が進んだこと。



「みんなで走らす湖東のバス企画」事業

助成額7,000千円

対象とする社会的孤立者：交通弱者（学生、高齢者）

湖東地区では、核家族や共働き世帯の母親たちが子供の通学等に伴う送迎負担を抱え、地域の交流が制限されている課題がありました。また、高齢者や交通弱者も移動手段に制約を受けて孤立していました。これらの問題は行政に要望されましたが、予算の制約から解決が難しく、住民は我慢や諦めを強いられていました。そこで、地域住民の積極的な参加と行動が求められると判断し、具体的な取り組みを開始しました。この事業では、住民が共助の形でバスを運営し、子供や高齢者などの交通弱者にバスサービスを提供しました。また、地域の課題や対策についての意見交換の場も設け、地域の発展に向けた議論を行いました。バスの運行開始により、交通弱者のための活動が始まり、住民たちは自分たちのためのバスという意識を持つようになりました。バス運行や意見交換により、将来への展望や希望が生まれ、地域全体が活気づいてきました。



湖東地区 お買い物 おてかけバス

予約申し込み制

各便 前10-30頃から前におうちの近くまでお迎え。お買い物の後は、おうちの近くまでお送り。安心・便利にご利用希望は電話予約して下さい。何回でもご利用可能。運営協力費：1回 ¥500お願いします。

愛知・湖東 コース	常陸 コース	尾張 コース
豊田駅前・三河大橋 15分 本人心付乗車料 2名 3000円(税込) 30分 3000円(税込)	豊田駅前・三河大橋 15分 本人心付乗車料 2名 3000円(税込) 30分 3000円(税込)	尾張駅前・尾張大橋 15分 本人心付乗車料 2名 3000円(税込) 30分 3000円(税込)

※予約は、電話・メール・FAXでお願いします。予約は、電話・メール・FAXでお願いします。

予約申し込み先：070-3776-0132

社会見学ツアー

バスによって湖東再発見

～かくれた湖東の良さを発見しよう～

2022年 8月18日(水) 9:00～10:30

対象 小学5、6年生
参加人数 40人(定員)
参加費 1000円(税込)※

申し込み先：湖東まちづくり 070-3776-0132

湖東地区の地域生活全体の課題を整理しよう!

2022年 11/12 (土) 13:30～15:30

参加費 無料

申し込み先：湖東まちづくり 070-3776-0132

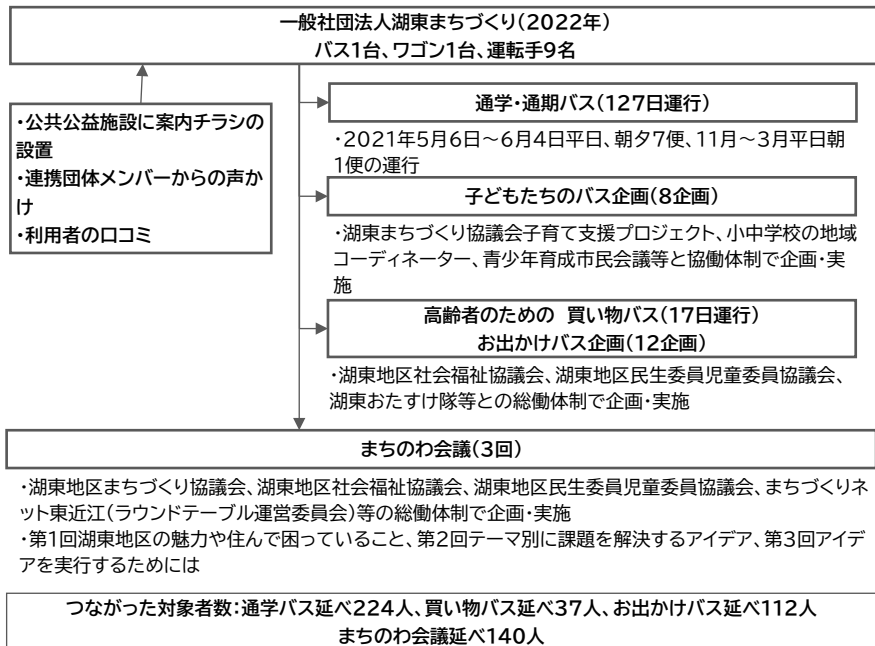
1. 通学バス
2. お買い物バス
3. 社会見学
4. まちのわ会議
5. バスチャリン
6. 社会見学チャリン
7. まちのわ会議チャリン

■体制とつながった対象者の人数

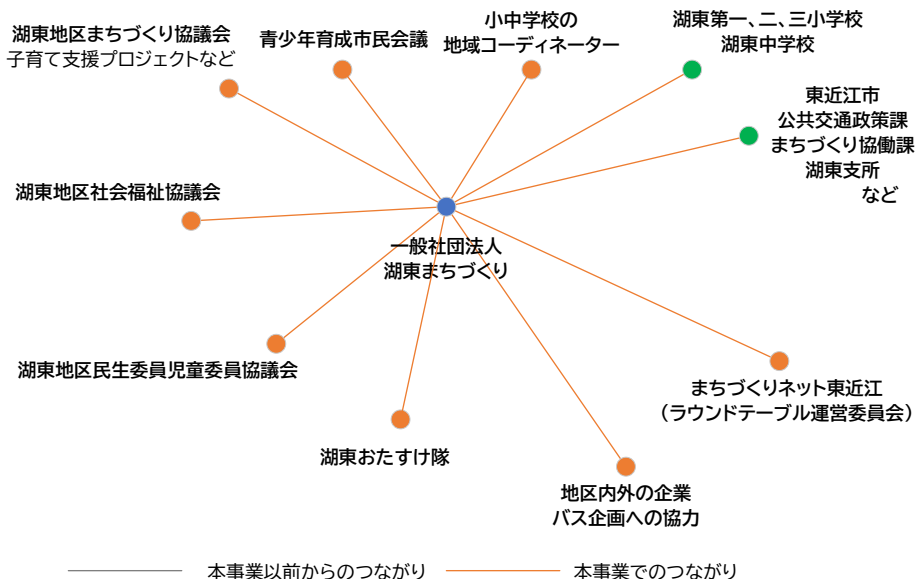
手を握る

手を握り続ける

地域につなげる



■総働体制図

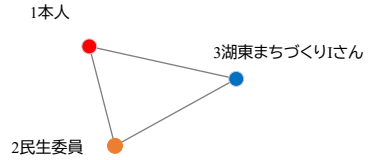


■対象者のつながり図

手を握る

湖東まちづくりとつながる

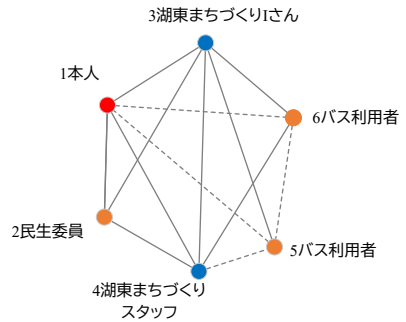
民生委員の紹介で、本人とつながりました。



手を握り続ける

お出かけバス、お買い物バスのスタッフや参加者につなげる

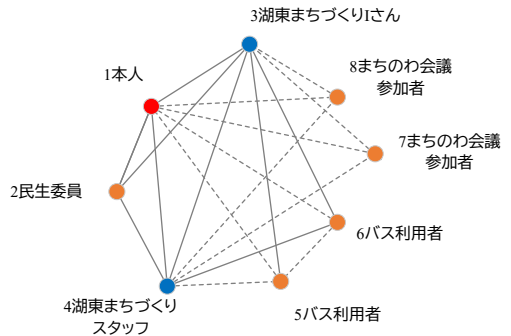
お出かけバス、お買い物バスの利用を促し、他のスタッフや参加者につなげました。



地域につなげる

まちのわ会議の参加により地域につなげる

まちのわ会議に参加を促し、地域の課題や将来像について意見交換することにより地域につなげました。



●:実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語:10年後を考えて!

最近、民生委員さんからお買い物やお出かけのバスのチラシを受け取りました。当初は私には関係のないものだと思っていましたが、民生委員さんからは「10年後を考えて、一度試してみてください。」と言われました。考えてみると、10年後には私も運転が難しくなっている可能性があるので、利用してみることにしました。バスに乗ってみると、移動中の高齢者サロンのような雰囲気、参加者同士の会話が盛り上がっていました。また、買い物も通販や移動車とは違い、楽しいものでした。お出かけバスはまるで小さな旅行のような気分でした。独り身の私にとって、お買い物やお出かけバスは楽しい日常の予定になりました。最近では、「みんなで走らす、みんなの湖東まちバス」のために私も行動しようと思ひ、知り合いに声をかけています。「10年後を考えて、一度一緒に乗ってみませんか」と。これからもこのバスの活動を支援し、地域の皆さんと一緒に楽しい時間を過ごしたいと思っています。

■成功した要因

- 1年目には能登川駅への通学バスを試走し、バス事業を進めてきましたが、市との協議が難航し、利用者数も伸び悩みました。しかし、1年間の運行により地域の認知度が向上しました。2年目では対象を通学者から子どもや高齢者向けの企画に変更したこと。この取り組みにより、関係者や利用者が増え、湖東のバス企画の基盤を築くことができたこと。
- まちづくりネット東近江のラウンドテーブル運営委員会との協働で、「まちのわ会議」という地域の話し合いの場を運営できたこと。さらに、湖東地区まちづくり協議会、湖東地区社会福祉協議会、湖東地区民生委員児童委員協議会との共催により、総働体制が築けたこと。
- 当初の通学バス事業の休止を決めたにもかかわらず、当団体の中核メンバー5人があきらめずに努力し、周囲に声をかけ続けてバスの運行を続けたこと。これにより、徐々に応援団や乗客が拡大したこと。

■主な非資金的支援の内容

- ロジックモデルの作成とこれを活用したメンバーの意思統一の支援。
- 進捗、年次、評価など報告書作成の支援。
- 精算報告の支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 目標設定、活動計画、評価指標などのプロジェクトの計画づくりのスキルの向上。
- 情報を整理して明確かつ効果的に伝えるスキルの向上。
- 経費の計算や精算報告書の作成に関する経理スキルの向上。

■波及的・副次的効果

- バスの運転手は予想以上の数が集まり、想定外の人員で運行ができたこと。
- 民生委員がお出かけバスや買い物バスのPRを行い、協力的な姿勢を示すようになったこと。
- 地域コーディネーターが子どもたちに地域の未来を考える場を提供し、地域意識を高める取り組みが始まったこと。これによって子どもたちの意見が大人の行動に変容を促し、地域の変革の可能性が生まれたこと。



地域みんなで産前産後・子育てを応援

助成額7,433千円

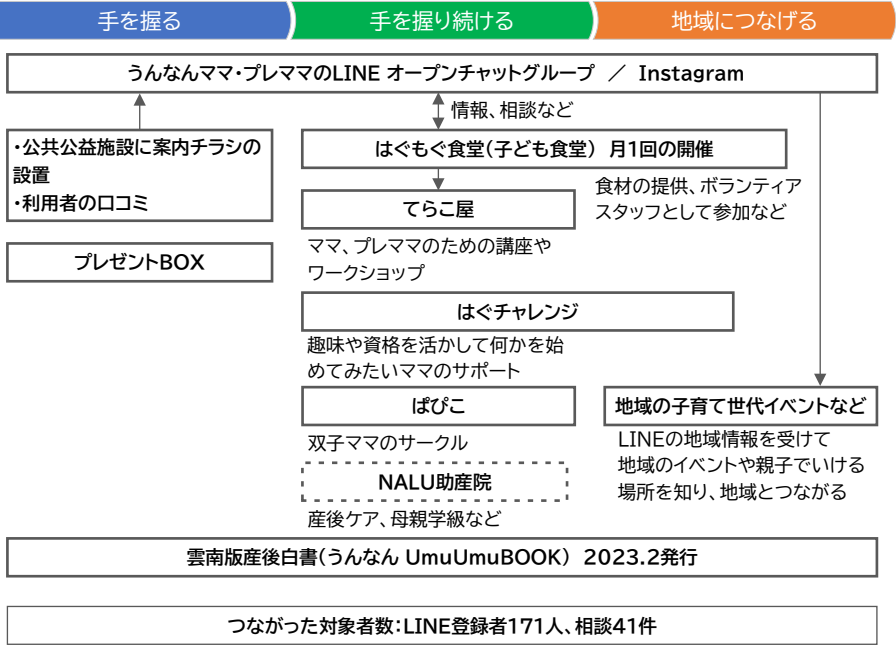
対象とする社会的孤立者：孤立している産前産後の女性

産後うつ増加などにより、妊娠中から産後一年までの死因は自死が一番多く、産前産後の女性ケアが重要視されています。原因は、妊娠から産後の間で支援場所や支援者が変わり一貫した支援がないことや、様々な要因で実家の支援がうけられなかったり、地域との繋がりの希薄さ、生む本人や家族それを取り巻く周囲の産後ケアの必要性の認識不足などがありました。このため、LINEオープンチャット機能を利用し、当団体や地域の先輩ママと妊娠中から繋がる仕組みや、「はぐもぐ食堂」を運営し気軽に参加できるコミュニティを作りました。また、「ママチャレンジ応援事業」による自己実現のサポートや、助産院と連携し「妊娠中の母親教室/産後ケア事業」により、妊娠中から知識を学び産後に向け準備できるよう、啓蒙と産後ケアを行ないました。地域連携も行き、子育て世代が多世代と交流できる環境を構築し、孤独を解消して安心して子育てできる環境を整えています。

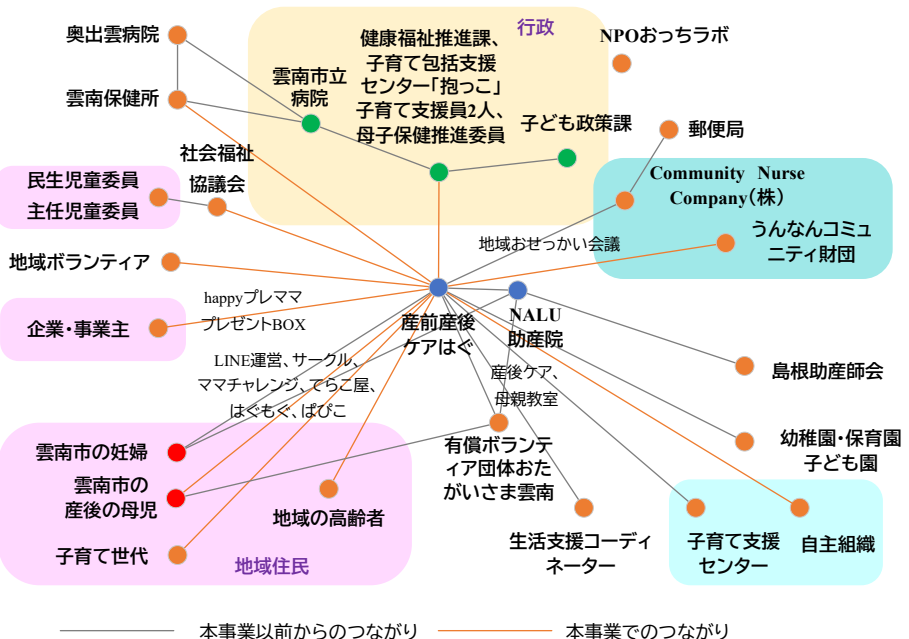


1. はぐもぐ食堂
2. てらこ屋
3. Happy プレママプレゼントBOX
4. うんなん双子サークル ぱびこ
5. はぐチャレンジ
6. 雲南版産後白書(うんなん UmuUmuBOOK)

■体制とつながった対象者の人数



■総働体制図

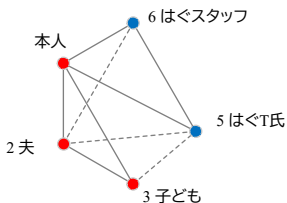


■対象者のつながり図

手を握る

はぐとつながる

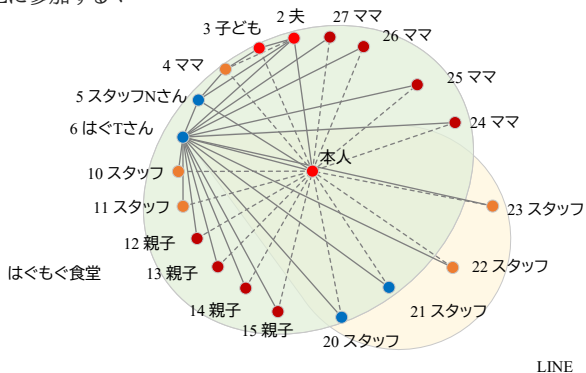
たまたま産後、公共公益施設に置いてあったチラシを見て、「はぐ」を知り、インスタを見て関心を抱き、LINEで「はぐ」につながった。



手を握り続ける

はぐもぐ食堂で、スタッフ、参加者と直接つながる

LINEのお知らせを見て、はぐもぐ食堂に参加して、リアルではぐのスタッフ、LINEに参加するママにつながった。

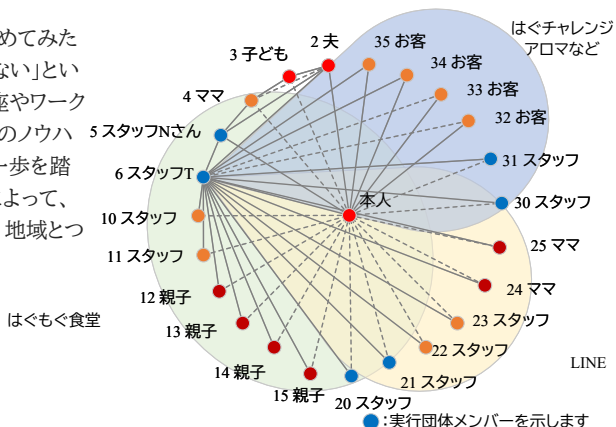


LINE

地域につなげる

はぐチャレンジにより地域につなげる

「趣味や資格を活かして何かを始めてみたいけど、どうしたらいいのかわからない」というママを対象に、はぐスタッフが講座やワークショップの開催に必要な広報・集客のノウハウを伝え、場所を提供することで、一歩を踏み出せるサポートをした。このことによって、自分自身の得意や好きを生かして、地域につながった。



LINE

●: 実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語:チャレンジの後押しに感謝!

はぐの季刊誌を作成するにあたり、地域のママにデザインをお願いしたいと思っていた時に、デザインを勉強中のママのTさんをご紹介いただきました。季刊誌作成を機に、はぐの活動を知ってくださったTさんは「はぐもぐ食堂」にも子どもさんと参加してくださいました。知り合って半年した頃に、Tさんは双子を妊娠されました。繋がりがあったので、妊娠してすぐに多胎サークルばびこをご紹介することができたり、トラブルがあった時はタイムリーに連絡をもらって相談にのらせてもらうことができました。

今回、妊娠から産後まで関わらせてもらう中でTさんからは「何かあった時にすぐに相談できる安心感がありましたし、妊娠中から食や身体のことや生活について、新たな視点を持ち見直すことができました。デザインも後押しをしてもらうことで大きな一歩を踏み出すことができました。チャレンジをさせて頂く中で、はぐさん以外の周りのサポートも増えて、母になっても自分のやりたいことを諦めずにチャレンジできる環境と応援して下さる人がおられるという今までには感じることのなかった雲南省の新たな一面に気づくことができました。」と話してくださいました。産後もはぐの活動に親子で参加し、他のママ達との交流の機会もあり、育児を楽しんでおられます。

■成功した要因

- 助産師や看護師といった専門職の経験やトレーニングがあり、お母さんたちに安心感を与える接し方がベースにあったこと。
- LINEは手を握り、握り続けるためのアイテムとなり、地域のつながりを強める役割を果たしたこと。プライバシー保護のため、途中からニックネームを使用し、相談が活発になったこと。
- はぐもぐ食堂が、ママたちが気軽に子供を連れて参加できる場として、初めての方が参加しやすい機会となったこと。そこでスタッフや他のママとの交流がゆるやかに行えていること。
- はぐもぐ食堂は、運営ボランティアスタッフを広く募ることで、学生や結婚前の世代、子供が巣立った後の女性、祖父母世代の人々にもつながりや役割づくりの場となってきたこと。また、食材の寄付やイベント・ワークショップの共同開催などにより、当団体に興味を持つ人々の関与を促し、多くの人々が集まる場となってきたこと。

■主な非資金的支援の内容

- リアルタイムでの相談支援。
- クラウドファンディングのメッセージの書き方など営業支援。
- はぐもぐ食堂の運営支援。
- 事務手続き支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 迅速かつ効果的に相談者の問題を解決するスキルの向上。
- メッセージやプロジェクトの魅力を的確に伝えるためのプレゼンテーションのスキルの向上。
- 業務報告書の作成など、効率的で正確な事務作業のスキルの向上。

■波及的・副次的効果

- LINE オープンチャットが防災情報網として機能:豪雨災害時にリアルタイムな情報交換が可能であり、防災面での助け合いや不安の解消に役立ったこと。
- はぐもぐ食堂が地域総働のアイテムに:学生と子育て世代の繋がりが生まれ、子育ての啓発の機会となったこと。空の巣症候群を抱える女性や地域高齢者にとってのつながりと役割づくりの場となり、楽しい時間を提供したこと。
- 雲南版産後白書の作成プロセスが新たな人のつながりに:白書の新聞掲載により市外の当事者からも相談があり、隣市の担当者につなげることができたこと。

一般社団法人みかた麹杜：雲南市
地域の応援者を増やして、
みらいのかのうせいをもっとたかめよう！

HP⇒



助成額10,080千円

対象とする社会的孤立者：学校での学びづらさや過ごしづらさを抱えている子
(発達障害を持つ子どもたち)

外見からはわかりづらいLD、HSP、ASDなどの特性や対応策の理解が遅れているため、学校で学びづらさや過ごしづらさを抱える子どもがいます。この事業では、情報提供や学習の場を提供し、子供たちが同じ悩みを持つ仲間や先輩と出会い、未来の可能性を感じられるよう、また、講演や講座などの広報活動を通して、学校での学びづらさや過ごしづらさに理解を深める地域の人々や協力者を増やし、当事者の子供たちと保護者が笑顔になれる地域を目指して活動しています。そのために拠点施設をつくりました。



1



2



3



4



5

- 1.第1回みかたがもった講座
柳家花緑師匠の落語と読み書き障害のお話し
- 2.第1回みかたがもった講座 あちこち講座(活動拠点にて)
- 3.パソコン活用勉強法講座にて
デジエ教科書の使い方を先輩に学ぶ
- 4.ディスレクシアの子どもへのデーティング指導
- 5.出口戦略 放課後デイサービス「みかたっこ」 開所式にて

■体制とつながった対象者の人数

手を握る

手を握り続ける

地域につなげる

みかた-NET(拠点施設、ホームページ)

個別相談(随時)

みかたKids塾

地域交流活動

学習会・体験会(5回)

みかた麴社(きつと)高等学院

・みかた麴社高等学院の生徒や地域の方と交流

・子どもや保護者の直接支援のための学習会、体験会

・広域通信制高校明蓬館高校のサポート校

・ミネラルカフェ(加茂遊学ファームの感謝祭に出席)

・就労体験
・地域の達人

親の会
(みかたネットワーク)

地域学習会(19回)

・LINEグループ

・地域の方も参加可能にした学習会

みかたっこ

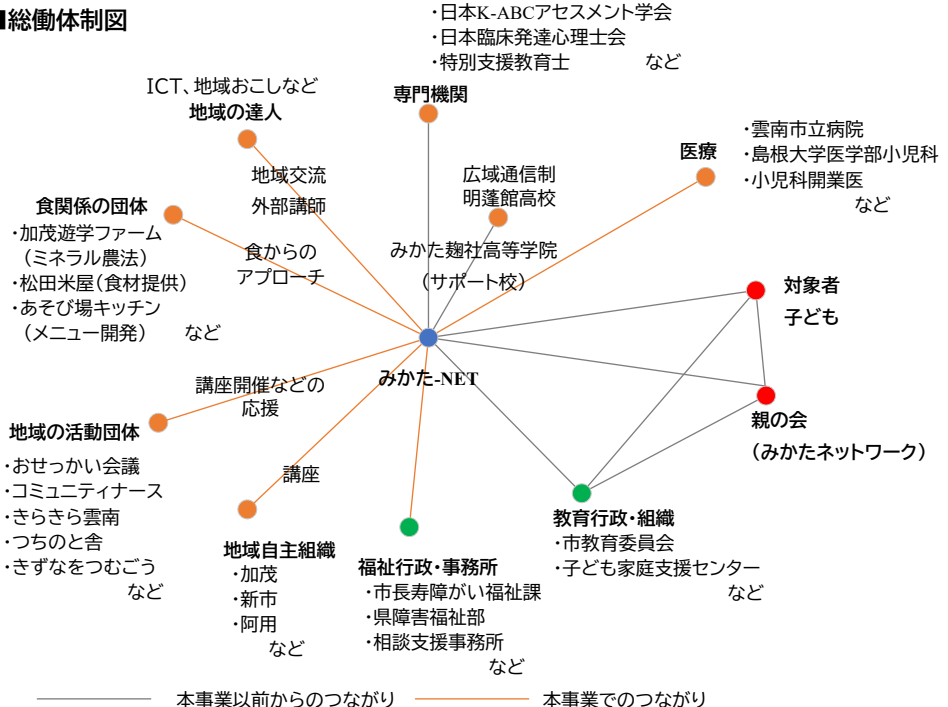
みかもった講座(4回)

・放課後等デイサービス(週6日、定員10名)(出口戦略として、休眠預金事業終了後開業)
・外部講師の療育もある

・地域活動団体の支援を受け実施
・講座動画の発信、鑑賞会(あちこち講座:10回)を各地区交流センター等で実施

つながった対象者数:14名(みかたKids塾12名、みかた麴社高等学院2名)、みかたネットワーク48名

■総動体制図



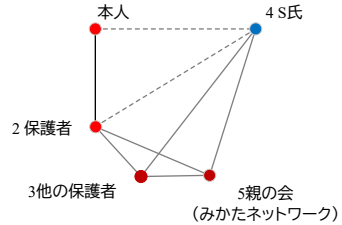
■対象者のつながり図

手を握る

みかた-NETとつながる

他の保護者の紹介で、親の会に参加していただき、小学校高学年から不登校になった子どもの保護者さんにつながりました。

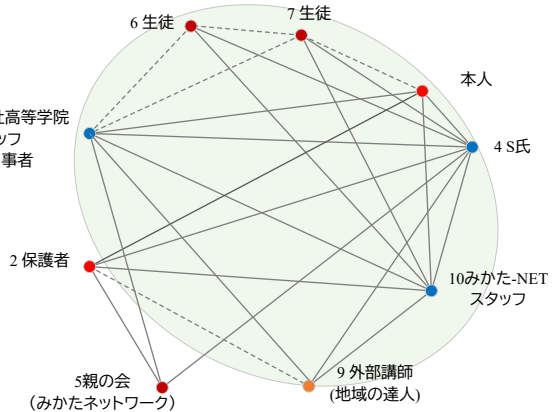
中学卒業前にみかた麴杜高等学院への入学相談を受けました。



手を握り続ける

「みかた麴杜高等学院」でスタッフ、参加者、外部講師とつながる

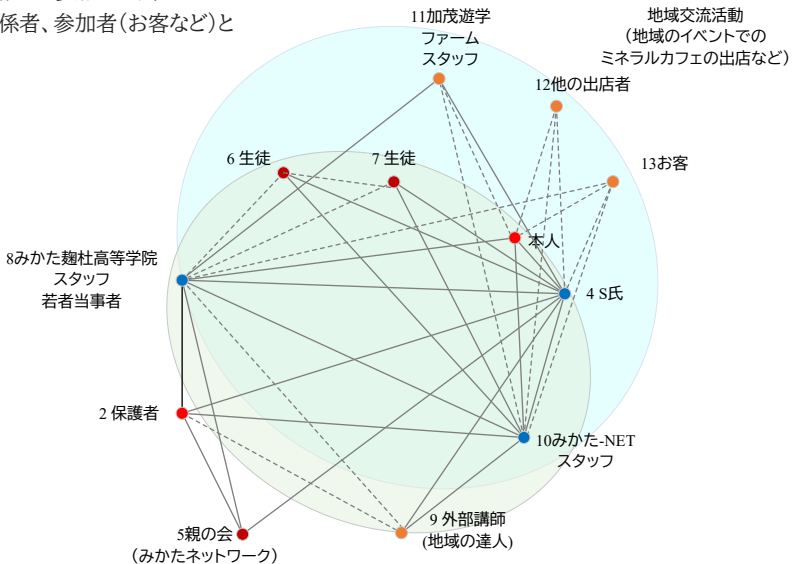
継続的な「みかた麴杜高等学院」へ通学できるようになったため、スタッフ、他の生徒、外部講師とつながりました。



地域につなげる

地域交流活動により地域につなげる

地域交流活動への参加により、そのスタッフ、他の関係者、参加者(お客など)とつながりました。



●:実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語：少しずつだが成長している。前を向いてやっていこう！

書くことが苦手で、簡単な計算もできず、小学校の高学年から学校に行けていなかった。母が見つけてくれた「みかた麴杜高等学院」でパソコンを文房具にした学び方に出会い高校卒業を目指している。1年次は週2～3日、2年次は週3日連続通うことができた。3年次は週4日連続で通うことにした。去年の僕の大きな成長はバス通学できるようになったこと。秋から家の最寄りのバス停まではお母さんに送ってもらって、バスで来ている。今年目標としてバス停までの2キロを自転車で行くことだ。高校を卒業して社会に出ることを考え、今は昼寝をしないことを目標に生活リズムを整えている。また地域のいろんな人にも出会おうと加茂遊学ファームの収穫感謝祭でみかた-NETが出店したミネラルカフェに参加した。最初はポケットに手をつっ込んで、暇だとスマホを見たり、お客さんに渡すときには片手で渡したり、接客にはふさわしくない態度と注意されたが、最後はちゃんとできるようになった。何よりも、初めて会った人とも話してみようと思えるようになった。少しずつだが成長している。前を向いてやっていこう！

■成功した要因

- 2017年度から学習障害児の認知特性に対応した学び方を指導する「みかたKids塾」で小中学生をマンツーマンで指導してきた活動、及び、2018年度から自宅の一部を開放し、明蓬館高校のサポート校「みかた麴杜(きつと)高等学院」を開講し、週に3、4回通ってくる生徒たちに指導してきた活動がベースになったこと。
- 地域の他団体と積極的につながりを持ち、「講座」や「学習会」などを通じて普及活動を丁寧に行い、認知度を高めたこと。この活動により地域の様々な団体との関係性が強化されたこと。
- 出口戦略として、休眠預金事業終了後、放課後等デイサービスを開業し、通学者の金銭的負担が軽減され、スタッフの充実が図られたこと。

■主な非資金的支援の内容

- おせっかい会議と接続し、雲南の社会資源とつながるチャンネルを確保したこと。
- 一般社団法人の定款変更手続きや情報発信支援で専門家の活用を提案し、自力でなくできる人に任せる発想の転換支援を行ったこと。
- クラウドファンディング中の情報発信方法の提案と励ましを行ったこと。
- 出口戦略としての放課後等デイサービス立ち上げ支援メニューやよろず支援拠点の紹介を行ったこと。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 行政書士や専門家の活用による作業負担の軽減方法の発想力の向上。
- おせっかい会議など地域の人々を巻き込む協働体制の構築スキルの向上。
- SNS・マスコミを活用した効果的な情報発信スキルの向上。

■波及的・副次的効果

- **地域団体の協力**：おせっかい会議や郵便局等、市内のさまざまな団体が活動に協力してくれたこと。
- **子どもだけでなく大人の発達障害の相談ニーズの顕在化**：企業や大人からの相談ニーズがあることが実際にわかったこと。



外国人住民のためのうんなん暮らし支援事業

助成額5,926千円

対象とする社会的孤立者:孤立している在住外国人

雲南市には約200人の外国籍住民がいますが、行政や地域サービスの利用方法やルール等の理解が十分でなく、病院の利用や緊急時の連絡、避難等に支障をきたしています。特に、技能実習生は地域との接点がなく、日本人住民から不安の声が上がったり、すれ違いが生じています。また、外国ルーツの子どもが疎外感を味わい、不登校につながるケースも起きています。このため、雲南市内2つの地域自主組織と連携し、日本人住民と外国人住民の交流を促進し、日本人住民向けの外国人とのコミュニケーション講座等を実施することで両者の関係を築き、誰もが住みややすく安心感のある雲南を目指します。



1



2



3



4



5



6

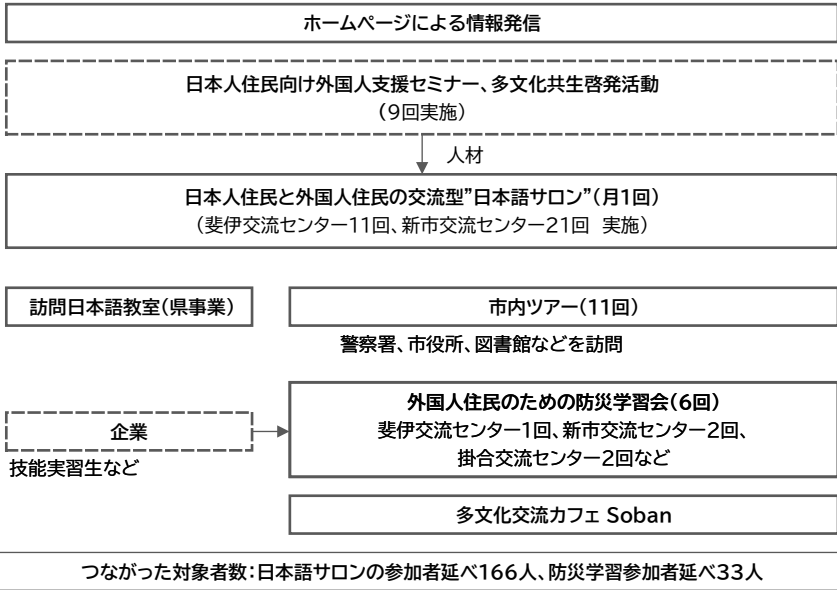
1. 日本語サロン
2. 掛合地区での技能実習生との防災交流会
- 3.4. 日本語サロンでの落とし物の届け方の日本語学習、警察署ツアーでの実践練習
- 5.6. 新市地区での伝統行事への参加、地元の住民との交流

■体制とつながった対象者の人数

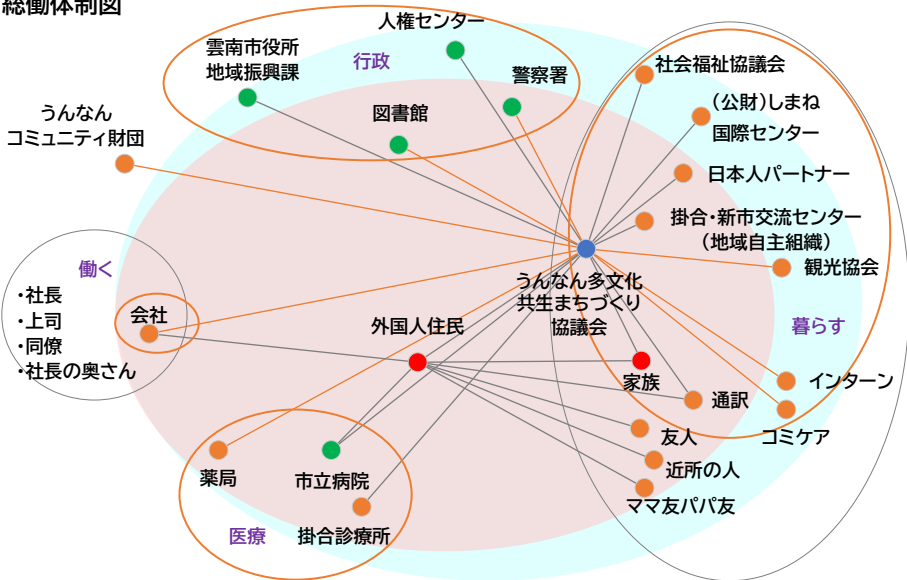
手を握る

手を握り続ける

地域につなげる



■総働体制図



—— 本事業以前からのつながり ——— 本事業でのつながり

ピンク背景 本事業後に自分でつながる(訪問する)、継続的につながることができる範囲

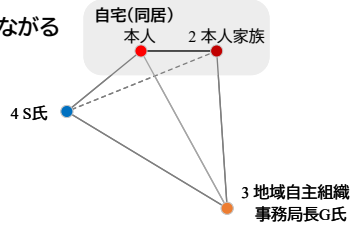
水色背景 本事業を通じて当事者とつながる機会を持った個人・団体

■対象者のつながり図

手を握る

多文化共生まちづくり協議会とつながる

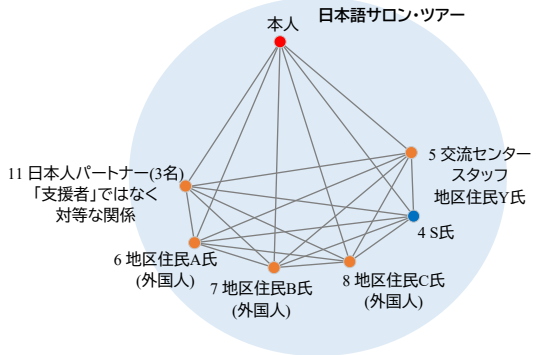
地域自主組織は広報誌で日本語サロンの活動を紹介し、その情報を見た本人の家族が本人の孤立を心配し、事務局長G氏に相談しました。事務局長G氏は本人の家族と実行団体を訪問し、実行団体S氏と本人をつなげることに成功しました。



手を握り続ける

日本語サロン、市内ツアーをきっかけに参加者や地区住民とつながる

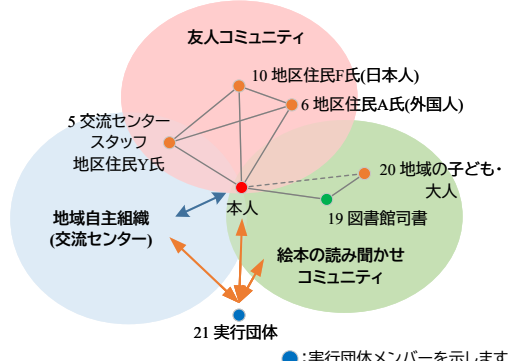
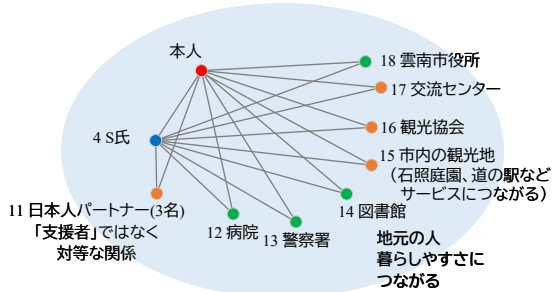
日本語サロンや市内ツアーを通じて参加者や日本人住民及び外国人住民とのつながりを深める取り組みを行いました。参加者たちは日本語サロンや市内ツアーを通じて新たなつながりを築き、平日はLINE等を通じて交流を続けています。



地域につなげる

日本語サロンや市内ツアーにより地域につなげる

さらに市内ツアーや日本語サロンを通じて地域とのつながりを強めています。市内ツアーでは地域の多様な人々とのつながりをつくってきました。また、図書館や人権センター等から絵本の読み聞かせのボランティアを依頼されたりと、地域住民としてのつながりを暮らしの中で継続しています。



● : 実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語：雲南での生活が少し楽しくなった！

日本在住8年の外国出身のAさん。二人のお子さんを育てながら、フルタイムでお仕事をされています。子どもたちが通う保育園ではそれぞれ送り迎えの時間も違うため、知り合いがなかなかできませんでした。また、コロナ感染拡大の中で母国の家族に会えない寂しさも抱えておられました。そんな中、協議会が実施する市内のツアーに複数回参加。同じ地区にママ友ができ、「雲南生活が少し楽しくなった」と話してくれました。今は市内のツアーだけでなく、地域での絵本読み聞かせボランティアや学校での多文化共生授業に参加したりと、活動の幅を広げておられます。

■成功した要因

- 実行団体の事務局を担う一般社団法人ダイバーシティうなんtoiroの代表者は、2014年から多文化カフェ等地域で活動しており、これまでの活動がベースにあったこと。
- ボランティア養成や災害のサポーター養成などしまね国際センターのサポートがあったこと。
- 技能実習生が多く住む『掛合地域自主組織』では、平成29年より事務局長が外国人住民との地域防災を考える必要性を感じ、会長や職員と勉強を開始していたこと。
- 新市自主組織では以前より国際交流員や雲南市在住の外国人を招き、交流事業を行ってきたこと。
- テーマごとに行政関係者や民間会社職員を講師として招致し、日頃接点のない外国人住民と交流し、外国人住民の実態を知ってもらう機会をつくったこと。実際の外国人住民との対話を通じ、やさしい日本語の必要性を体感してもらったこと。

■主な非資金的支援の内容

- 財務、規程作成など管理部門についての支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 規程の整理ができたこと。
- 成果を可視化するスキルの向上。

■波及的・副次的効果

- 地元企業への雇用創出：外国人4名の地域活動への参加が地元企業から仕事の紹介を受け、採用につながったこと。
- 外国ルーツの子どもたちの変化：支援対象者だった外国ルーツの子どもたちがボランティアとして参加し、サポート側として活躍したこと。
- 外国人保護者の活動参加による活動拡大：外国人保護者の参加により、予定していなかった外国ルーツの子どもクラスが開講され、日本語学習を助ける場となったこと。関係団体と市の関係部署が日本語力や公的な支援について共有し、話し合う機会が生まれた。
- 日本人住民の学びの場：UIターン参加者や地元の日本人住民が外国人住民と共に学ぶ場となったこと。
- 関係者の意識の変化：訪問先の施設での案内文書や多言語化が進み、関係者の意識の変化が見られたこと。高校生が地域の診療所と交流センターを訪問し、外国人住民と利用しやすさについて話し合った結果、診療所関係者が外国人の診療について見直し、多言語での診療案内の作成につながったこと。



個性を育む創造プロジェクト 助成額8,037千円

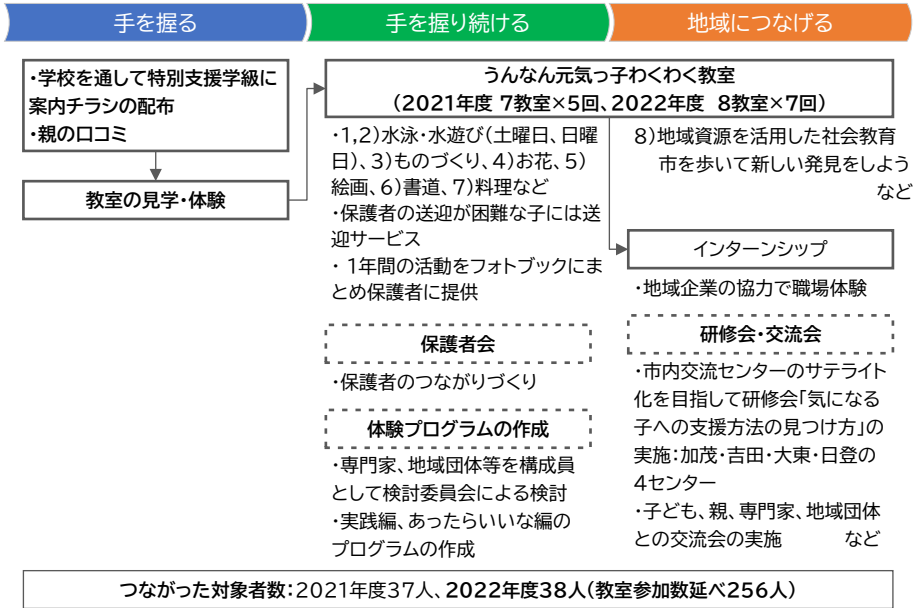
対象とする社会的孤立者：特別支援学級に所属しているこどもたち／不登校の児童・生徒／
経済的に困難な家庭のこどもたち（就学前～高校生）とその保護者

雲南市の「うんなん元気っ子わくわく教室」は、12年間にわたり放課後子ども教室を実施。週末や長期休業日には年間約400回の体験プログラムを提供しています。しかし、特別支援学級や不登校のこども、経済的に困難な家庭のこどもなど、特に支援が必要なこどもたちが参加していませんでした。そこで、彼らに向けて「社会教育体験プログラム」を作成・実施し、様々な体験活動の場を提供。学校、家庭、地域（企業やNPOなど）、行政が連携・協働し、個性を育む「生き抜く力」を育てています。

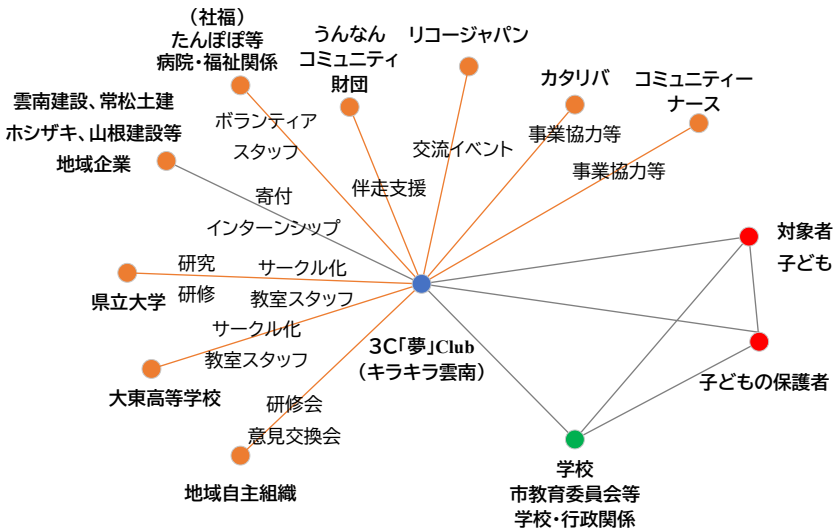


1. 交流会、2.水泳・水遊び教室、3.料理教室、4.書道教室、5.お花教室、6. 雲南探索

■体制とつながった対象者の人数



■総動体制図

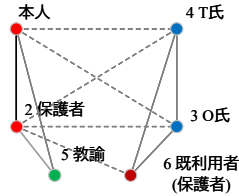


■対象者のつながり図

手を握る

3Cとつながる

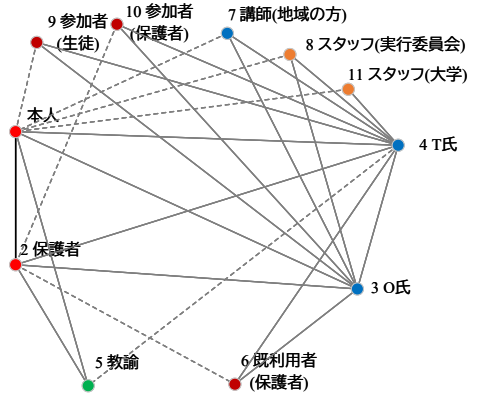
既存の利用者である保護者の紹介で3C窓口O氏とつながりました。
O氏がT氏につなげました。



手を握り続ける

参加する教室で講師、スタッフ、参加者とつながる

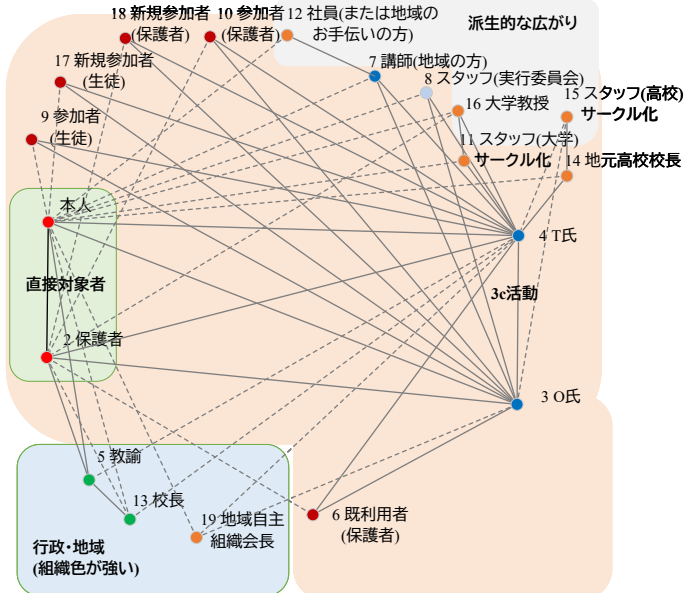
継続的な教室への参加や日常の連絡により、つながりを深めました。
継続的な教室により講師やスタッフ、他の参加者につながりました。



地域につなげる

3C活動やインターンシップにより地域につなげる

教室の3C以外のスタッフや交流会インターンシップなどにより、地域につなげました。
3CのT氏が活動実績をまとめたお便りを学校や関係機関に配布することで、活動や孤立者についての周知を図りました。



● : 実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語：調理師になりたい！

僕は料理が大好きな中学3年生です。中学1年の時、学校で配られた案内チラシを見て、月に1回の「役に立つ楽しい料理教室」に通い始めました。先生から料理を教わるのは、小学生から中学生までの約6人です。毎回新しい料理に興奮します。最近では先生のアシスタントもやっています。頼られることが嬉しいです。今年の夏、和食の先生のもとで5日間のインターンシップをしました。松前漬けづくりや穴子寿司の包装、しじみの小分け、サイコロステーキの焼きなどを手伝いました。最初はうまくできませんでしたが、質問して覚えていくうちに、最終日には上手にできるようになりました。僕は調理師になりたいと思っています。

■成功した要因

- 平成19年度から体育文化施設において放課後子ども教室を実施してきた3C「夢」Clubの構成員である(株)キラキラ雲南の活動がベースにあったこと。
- 毎月、「活動のおたより」や「年次の活動報告書」を作成・配布し、研修会や交流会などを通じて普及活動を丁寧に行い、認知度を高めたこと。
- 送迎困難者に対して送迎を実施したこと。
- スタッフも専門性がないため、専門家である島根県立大学の西村准教授に助言・指導を受けてスキルがアップしたこと。保護者会でのアドバイスや個別面談により、対象者や保護者の気持ちに変化があったこと。
- 専門家、行政、地域団体が協働で、雲南市において初めて、社会教育における体験活動プログラムを作成したこと。この協働により関係性が強化されたこと。
- 島根県立大学や大東高校の学生が、授業で事業紹介をしたのを契機に、ボランティアアシスタントとして教室に参加し、年齢の近い子どもたちの活気につながったこと。

■主な非資金的支援の内容

- 財務、経理、組織運営などについての支援。
- 特に実行委員会形式のため、事業牽引者にすべての負担がかかっている状態だったため、面談を通じて事業計画の共有や役割の認識、分担の整理などの支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 収支管理簿、現金出納帳、証拠書類などの財務管理スキルの向上。
- 月例会議の議題や報告を通じて、組織内での情報共有スキルの向上。
- 組織の持続可能性のために、自身の目標を設定し、自己資金を調達するスキルの向上。

■波及的・副次的効果

- 大東高等学校や県立大学でのサークル活動化：教諭のスタッフ参加や大学生のボランティア参加を通じて、今後の活動へのボランティア参加希望の取りまとめや特性対応の研修の場を設けるサークルを立ち上げる動きが出てきたこと。
- インターンシップの実施：講師という立場や本事業を通じて特性の受容について理解が進み、本人の希望に応じたインターンシップ機会の提供というパートまで話が進んだこと。また、実施した際の成功体験から次年度以降も必要があれば対応するという協力体制が構築できたこと。



空き家対策・移住・定住促進事業 助成額5,036千円

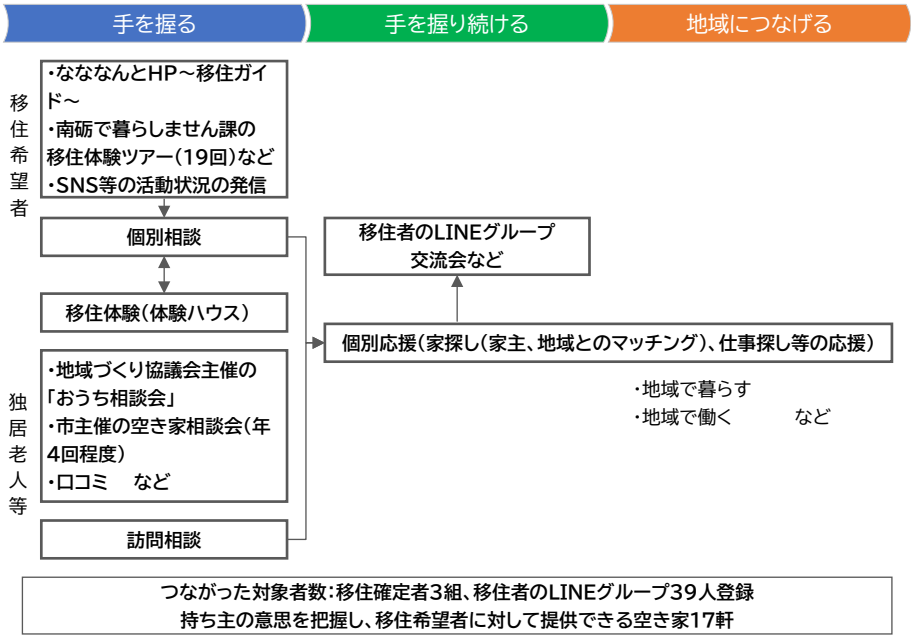
対象とする社会的孤立者：移住希望者、Uターン希望者／
持ち家の継承に悩む一人暮らしの高齢者

南砺市では人口減少により空き家が増加する傾向があり、特に所有者が他県・他市にいる場合は管理が行き届かないものが見られます。また、独居老人宅や高齢者夫婦世帯が増加し、将来的には空き家となる可能性がある空き家予備軍も増えています。同時に、都市部からのUターンや移住希望者も増えていますが、移住の障壁が存在し、なかなか決断できない状況も見受けられます。このような状況に対応するため、一人暮らしの高齢者との信頼関係構築や、空き家予備軍の有効活用を促進するとともに、また地域全体での移住支援体制の整備に取り組んでいます。これにより、地域の活力と環境を守ることを目指しています。

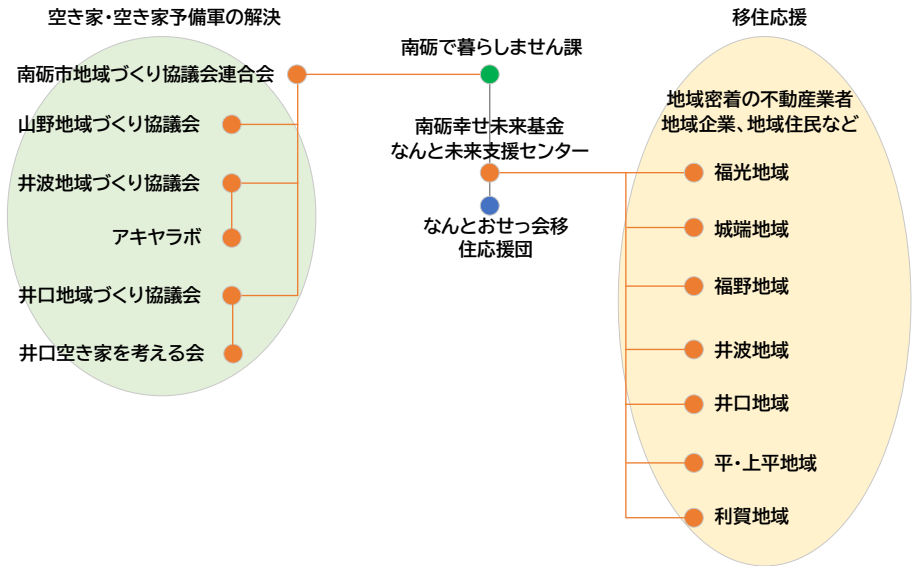


1. 移住体験ツアーの際の先輩移住者の体験談、意見交換
2. 山野地域で『おうち相談会』
3. 移住体験ツアーの際の山間部で雪かき体験
4. 移住希望者への空き家の紹介
5. 空き家見学

■体制とつながった対象者の人数



■総動体制図

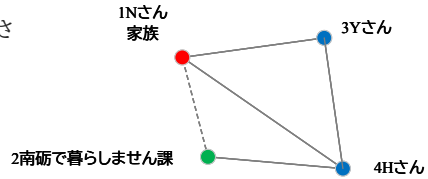


■対象者のつながり図

手を握る

移住応援団とつながる

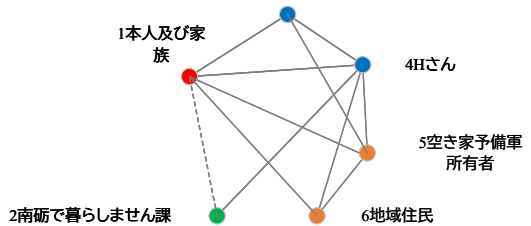
南砺で暮らしません課の紹介で移住応援団Yさん、HさんとNさんがつながりました。



手を握り続ける

空き家予備軍所有者と地域の人とつながる

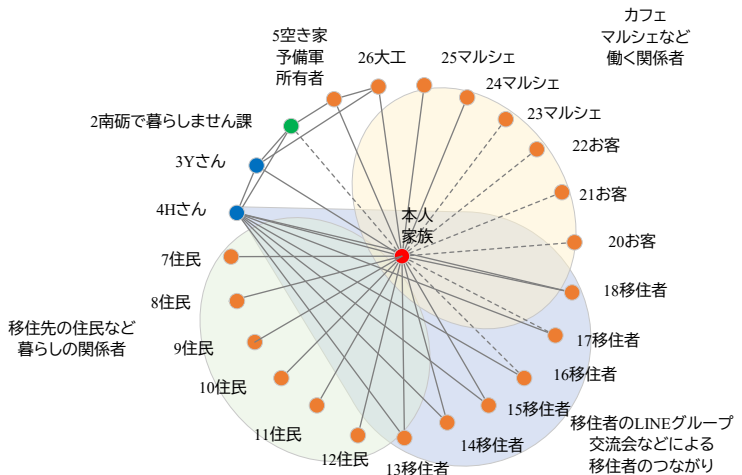
移住応援団Yさん、Hさんの紹介で、空き家予備軍所有者さん、近所の住民とつながり、移住を決めました。



地域につなげる

働き暮らし、移住者等のコミュニティにより地域につなげる

移住先の住民の他、移住先のリノベーションを手伝う大工とつなげ、LINEグループや交流会により先輩移住者たちとつなげました。また、住民の仲介で農地も借りて自然栽培で農作物を育て、令和5年3月にはVeganカフェをオープンしました。カフェで最近マルシェを開催して、たくさんのお客さんともつながりました。



●:実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語：南砺に移住して本当に良かった！

富山市に住んでいた私たちは、自然栽培で農作物を育て、収穫したものを料理して提供するVeganカフェを開業することを考えていました。南砺市で空き家を探していると相談すると、移住応援団の方々が親切に手助けしてくれました。いくつかの物件を紹介していただき、その中の1軒が、私たちが今住んでいる家でした。初めてこの家に足を踏み入れた時、子どもたちは自分たちの家のように駆け回り、以前の持ち主であるおばあちゃんとも初対面のような感じはしませんでした。子どもたちもおばあちゃんに最初からなついていました。家の中の蔵や納屋も全て見て回り、ここが気に入ったので即座に購入することを決めました。令和4年に南砺市へ移住し、近所の大工さんの手を借りながら家族でリノベーションを進めました。また、農地も借りて自然栽培で農作物を育て始めました。そして令和5年3月にVeganカフェをオープンしました。カフェで最近マルシェを開催したところ、約100人の人々が訪れてくれました。南砺に移住して本当に良かったと心から感じています。

■成功した要因

- 移住は空き家の紹介だけでなく、移住希望者が希望する家や住む地域の人々、働く職場とのマッチングを応援することが重要です。このような応援を行うため、地域密着の不動産業者が組織を構成できたこと。
- 最初は空き家対策推進委員との協力を試みましたが、彼らは主に空き家の調査に特化しており、実際の空き家予防についてはあまり関心がない方が多かったです。また、個別に地域の空き家予備軍宅を回り、話をする計画もありましたが、不信感もあり、思うような協力を得ることができませんでした。そのため、地域づくり協議会のメンバーは地域の空き家問題を自身の課題として取り組んでくれることがわかり、『おうち相談会』を開催することで、問題を抱えている空き家予備軍の方々と出会えたこと。

■主な非資金的支援の内容

- 行動の目的を見失わずに進めるために、常に目的と意義を問いかける習慣化の支援。
- パソコンの選定やオンラインコミュニケーション、ファイル共有の方法など、環境整備の支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 目的と意義を問いかける習慣化や環境整備の支援を通じて、プロジェクト全体を効果的に管理するスキルの向上。
- パソコンの選定や環境整備の支援を通じて、自身の作業環境を最適化するスキルの向上。

■波及的・副次的効果

- 山野地域づくり協議会でのおうち相談会の事例を他の地域にもアピールすることで、関心を持ってくれる地域が増えたこと。
- 成功と失敗を含めた経験を共有し、地域の空き家予備軍や空き家問題に対する不安を持つ地域にも取り組み方を提案することができたこと。
- 井波地域で活動する『アキヤラボ』は、地元の移住や空き家問題に特化した団体で、住むだけでなく、空き家を活かした起業を促進するなど地域の活性化を目指しています。この団体と連携し、お互いの取り組みや問題点を共有して、活動が改善できたこと。



お寺初！おかささん目線の雇用創出事業

助成額6,754千円

対象とする社会的孤立者：子育て中で働く場がない女性

女性の継続就業率は上昇していますが、第一子出産後の離職率が高い課題があります。正規職員は育休の取得により改善されていますが、非正規職員には影響がありません。子育て中の女性は働きたいと思っていますが、求職活動が少ないのが問題です。そこで、女性が楽しく働きながら地域とつながる場所を提供し、おみやげの製造・販売を通じて井波の魅力や歴史を学び、情報を発信して孤立を減らしたいと考えます。具体的には、おみやげ製造・販売、ワークショップができるように、ジョブトレーニングや情報発信の学習機会を提供しました。柔軟な働き方も可能にしました。また、瑞泉寺山門の外の売店を改装して地域の人々と交流できる場所になりました。井波は観光の拠点なので、広く発信しファンを増やしています。子育て中の女性の視点でSNSを活用し、写真撮影や顧客対応、商品発送などを学ぶプログラムを提供し、女性の個性と特技を活かした働く場となりつつあります。



1. テラまち雑貨店と瑞泉寺の山門
2. ワークショップ
3. かき氷の販売
4. コカコーラ協力のもと、井波彫刻でデコレーションを施した初めての自動販売機

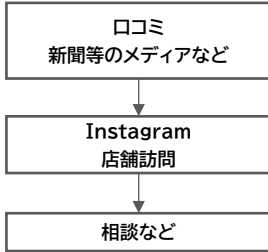
■体制とつながった対象者の人数

手を握る

手を握り続ける

地域につなげる

テラまち雑貨店(店舗、Instagram)

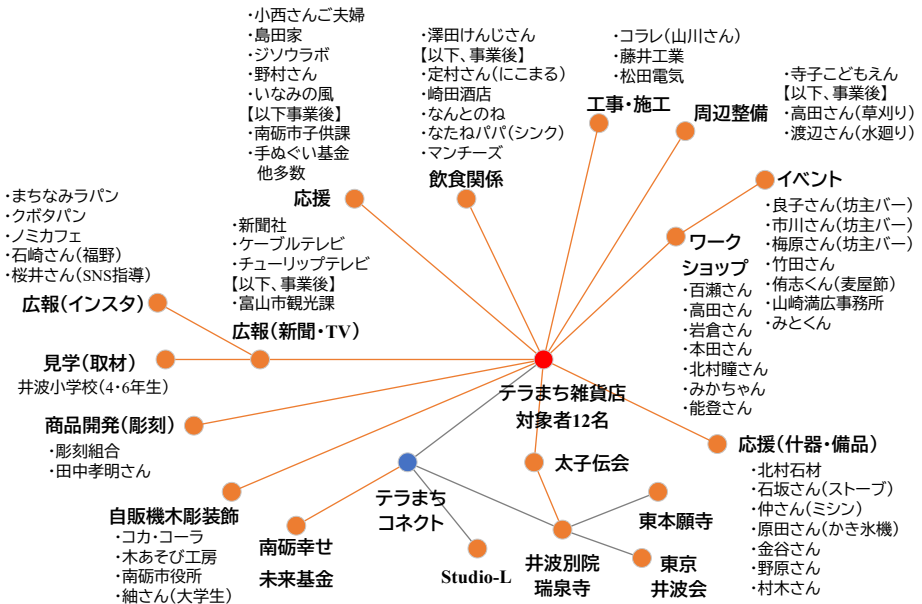


- ・1)自分の得意なこと、好きなこと、興味のあることの聞き取り、
- 2)テラまち雑貨店の目的、地域の中の役割の説明、3)ジョブトレーニングや情報発信の学習、4)絵本作り、お土産づくり、働いているスタッフ、会計などグループごとのLINEグループ
- ↓
- ・スタッフ、関係者等のつながりづくり

- ・1)彫刻組合や飲食関係など地域事業者と連携したおみやげ、ワークショップ等の企画・開発、
- 2)コーヒーをはじめとした飲食を提供、3)おみやげの販売など
- ↓
- ・地域住民や観光客との交流
- ・地域の応援団とのつながりづくり

つながった対象者数:テラまち雑貨店スタッフ12名、Instagramフォロワー900人程度

■総動体制図

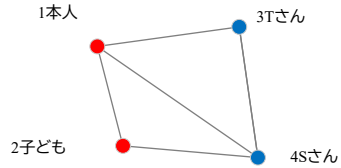


■対象者のつながり図

手を握る

テラまちコネクトとつながる

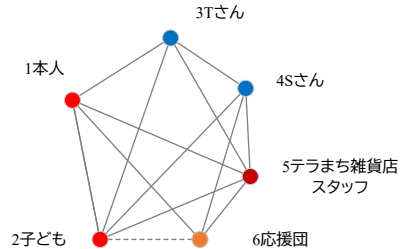
子どもが瑞泉寺に行ったことをきっかけに、テラまちコネクトSさん、Tさんとつながりました。



手を握り続ける

テラまち雑貨店のスタッフや応援団につなげる

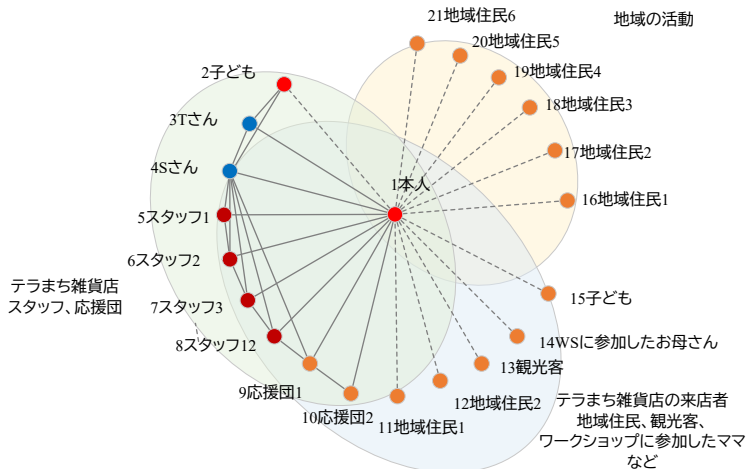
テラまちコネクトの紹介で、テラまち雑貨店のスタッフ、応援団につなげました。



地域につなげる

テラまち雑貨店の活動、地域活動への参加等により地域につなげる

テラまち雑貨店の活動により来店者、地域活動への参加などにより地域につなげました。



●: 実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語：子育てをしながらも輝ける環境をつくりたい！

子どもを保育園に預けており、保育園から瑞泉寺についての話を聞き、気になっていました。私はお菓子づくりが得意で、体に良いものをつくっていました。そのため、誘いを受けてスタッフとして関わることになりました。お菓子づくりだけでなく、様々な人との会話も楽しんでいました。井波に興味を持ち、子供が卒園するタイミングで井波に引っ越ししました。瑞泉寺にも関心を持ち、太子伝や鯖寿司づくりにも参加しました。その結果、地域の人々とのつながりも広がりました。これまでに、私は多くの人々に支えられました。その経験から、人々とのつながりや支え合いの大切さを痛感しました。私は、テラまちでスタッフとして関わっていますが、まだ地域には同じような女性が多く存在していることに気付きました。私は、自分の経験や能力を活かし、地域の女性たちを支援し、彼女たちが輝ける環境をつくりたいと思っています。

■成功した要因

- 働き始める際に、女性たちに自分の得意なこと、好きなこと、興味のあることを聞き取り、これを生かした活動につなげたことで、スタッフの満足度を高めたこと。
- 研修期間にテラまち雑貨店の目的、地域の中の役割をきちんと説明した結果、自ら考えるようになり、その時に必要なことを考え、動けるようになったこと。
- 活動を通じて地域のネットワーク(人脈)を広げていったこと。

■主な非資金的支援の内容

- 行政とのつながりの支援。
- 対象者の企業支援でなく、居場所づくりがミッションと気づいた際の事業計画の変更支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 行政とのコミュニケーションスキルの向上。
- ミッションや目標の再定義とそれに基づく戦略の策定スキルの向上。
- ビジネスモデルの再構築や事業戦略の見直しのスキルの向上。

■波及的・副次的効果

- 地域の人たちが日々の散歩のついでに訪問してくれるようになり、女性たちと会話する機会も増え、井波のこと、瑞泉寺のことを女性たちが学ぶ機会となったこと。
- 女性スタッフの子どもたちがテラまち雑貨店に関わってくれたこと。
- 新聞や県の観光情報誌など様々なメディアに出ることが増えた結果、京都の本山(東本願寺)や大阪駅でのイベントにテラまち雑貨店が出店する機会を得たこと。
- 井波の若手の女性彫刻士がアクセサリーづくりで協力してくれたこと。これにより、井波の若手の女性彫刻士の活躍の場や機会が増えたこと。
- 彫刻師10人と建具屋が協力して、店舗横のコカ・コーラ自動販売機の装飾を実現しました。驚くべきことに、素人のスタッフがデザインを手がけ、それに対してコカ・コーラが稀な許可を出しました。彫刻にはコカ・コーラのロゴ使用を希望しましたが、それをコカ・コーラが協力してくれました。さらに、自動販売機の色も赤色からグレーに変更することを許可してくれました。このように、地域の子のママの思いが世界企業を動かす結果となりました。



引きこもりや精神障害があり孤立状態の人に
社会参加の環境を創る

助成額4,857千円

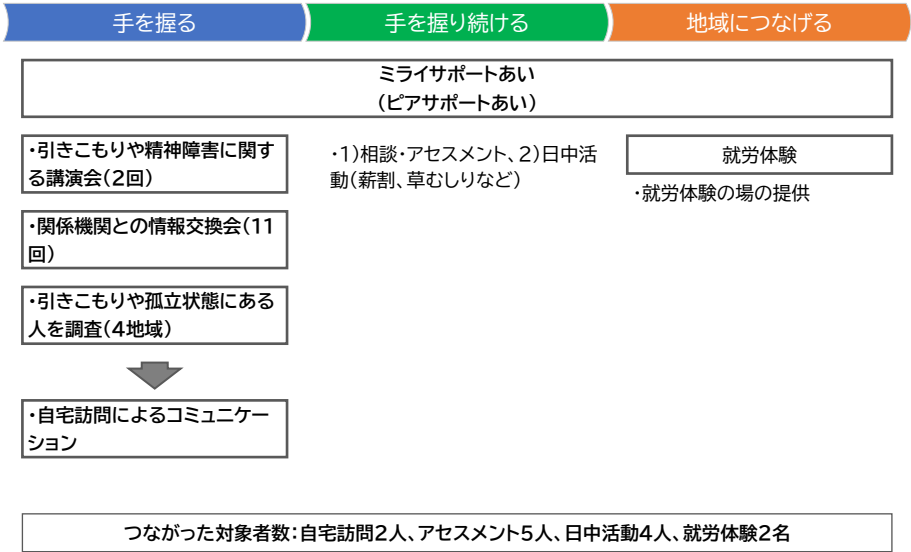
対象とする社会的孤立者：引きこもりの方、孤立する精神障害のある人

引きこもりや精神障害の人々への支援不足や社会参加の困難さが問題とされています。現在、適切な事業所や支援者が不足しており、孤立者が相談や成功体験のできる場所も不足しています。この問題を解決するために、次の取り組みを行いました。1)まず、引きこもりや精神障害に関する講演会や関係機関との情報交換会を実施し、引きこもりや孤立状態にある人々の調査を行いました。2)その結果をもとに、孤立者を支援する組織を構築し、相談窓口を設けました。さらに、彼らを理解するためのアセスメントを行いました。3)また、気軽に立ち寄れる居場所をつくり、日中の活動への参加を促す取り組みを行いました。さらに、居場所では余暇活動だけでなく、就労体験の機会も提供しました。これらの取り組みを通じて、孤立者が社会参加や就労を通じた自己実現を達成することを目指し、引きこもりや精神障害者だけでなく、地域住民全体が元気になり、豊かな暮らしと幸福を感じる街づくりに貢献することを目指しています。

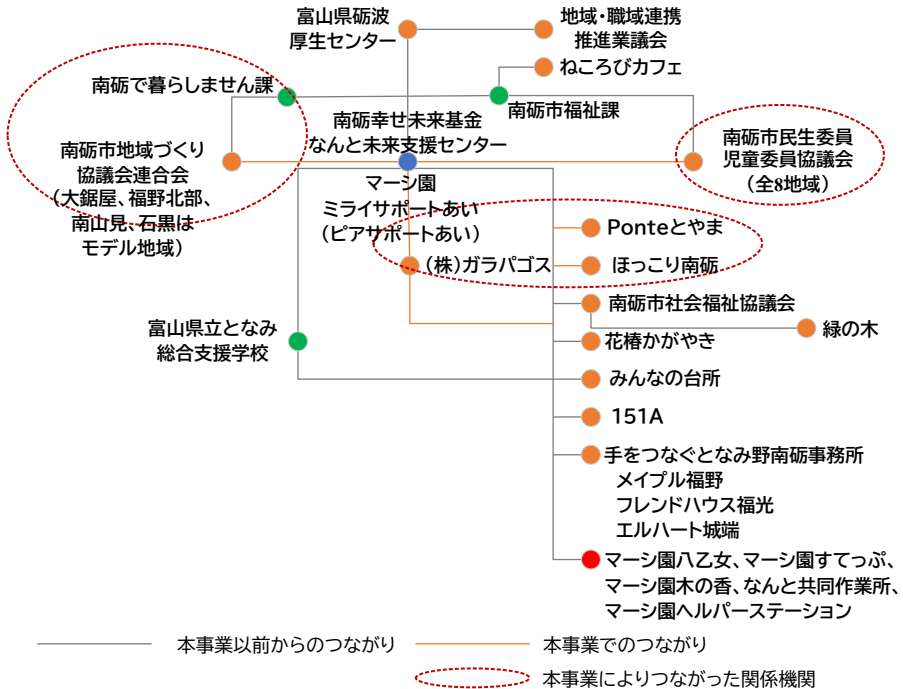


1. 2. 福野北部地域づくり協議会 意見交換会
3. 引きこもり等支援連携担当者会議
4. ミライサポートあい 日中活動 薪割

■体制とつながった対象者の人数



■総動体制図

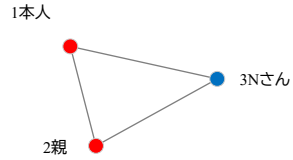


■対象者のつながり図

手を握る

ミライサポートあいとつながる

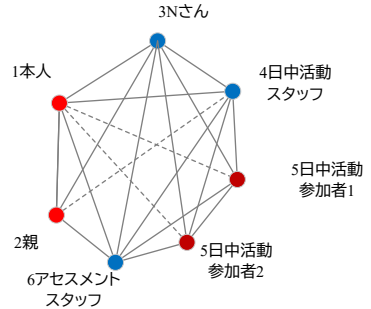
親がミライサポートあいの案内チラシを持って、
本人を連れて訪問して、つながりました。



手を握り続ける

ミライサポートあいのスタッフや利用者につなげる

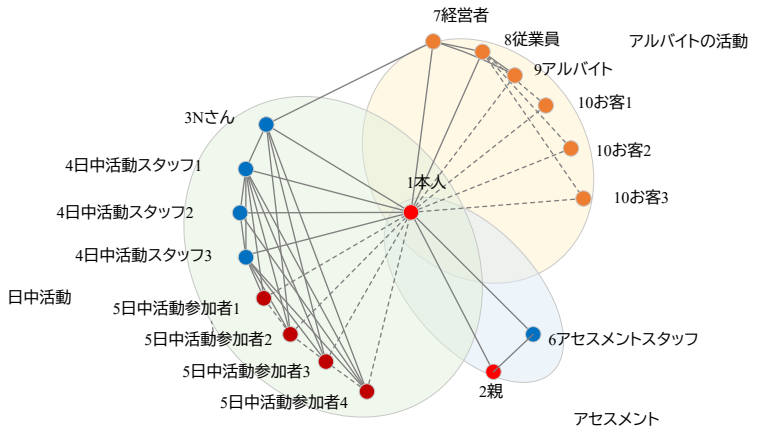
ミライサポートあいのアセスメントや日中活動に参加を促し、スタッフ、参加者につなげました。



地域につなげる

地域商店でのアルバイト等により地域につなげる

ミライサポートあいのアセスメントや日中活動に参加しつつ、地域商店でのアルバイト等により地域につなげました。



●: 実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語:将来への方向性を模索する日々!

私は17歳の時、高校を退学し、家に引きこもる日々が続きました。そんな時、お父さんがミライサポートあいという支援組織に連絡を取ってくれました。彼らとの話し合いを通じて、心が落ち着いてきたんです。その結果、再び高校に戻りたいという思いが芽生えました。ミライサポートあいのサポートのもと、受験勉強に取り組みましたが、定時制の学校への挑戦は叶いませんでした。その後、バイトをすることも提案されました。最初はお父さんが不安そうでしたが、説得してバイトを始めました。現在は週に3回、バイト先で働いていますが、週に1、2回はミライサポートあい顔を出しています。成人式が近づいていますが、私は将来への方向性を模索する日々を送っています。

■成功した要因

- 2011年度からのピアサポートあい(自立と相談と交流の場)の活動がベースにあったこと。
- ピアサポートあいという相談と居場所の拠点ができたこと。
- 引きこもりや精神障害に関する講演会や、関係機関との情報交換会、市内全世帯へのチラシの配布などを実施して、丁寧にピアサポートあいの周知をしてきたこと。

■主な非資金的支援の内容

- 事業開始時にガラバゴスの関係者と連携するために意見交換して、2021年5月以降は、毎月の月次会議を両実行団体で行い、対象者の情報共有や協力関係の構築づくりの支援。
- 31地域づくり協議会全てで引きこもり等の調査を予定していたが、内容などが上手に伝わらず協力が得られなかったため、中間支援組織のなんと未来支援センターや暮らしません課及び地域づくり協議会会長を仲介し、4地域づくり協議会でモデル事業を行うようにした支援。
- 当初の計画になかった南砺市全体の民生児童委員協議会との関わりを得るため、POが福祉課や南砺市民生委員児童委員協議会会長を紹介し協力を要請して、南砺市の全ての地区民生委員児童委員協議会との協力体制づくりの支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- 中間支援組織や地域づくり協議会、民生委員児童委員協議会との連携によるコミュニケーションスキルの向上。
- ガラバゴスや関係者との意見交換や月次会議を通じて、対象者に対するプロジェクトマネジメントスキルの向上。

■波及的・副次的効果

- 成年者を対象としていた事業において、不登校や高校中退者のニーズが浮上し、未成年者への支援も行われることとなった。年齢の壁を取り払い、ワンストップで対応できる体制整備の必要性が共通認識されたこと。
- 住民自治組織である南砺市地域づくり協議会との連携を主体に計画したが、理解が得られずに31地域から4地域のモデル事業に縮小した一方で、南砺市民生委員児童委員協議会との連携は予想を上回る体制構築に結びついたこと。
- ガラバゴスとの連携により、当事業には想定外の効果が現れ、ミライサポートあいにおいて薪割り作業などが導入されることができたこと。

株式会社ガラパゴス：南砺市
桜ヶ池キャンプ場

～キャンプ場における事業で、引きこもりと障がい者
の方を雇用することにより社会につなげる～

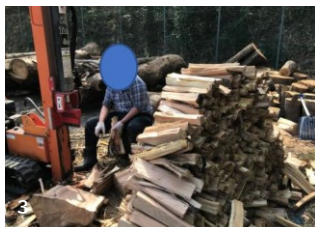
HP⇒



助成額7,120千円

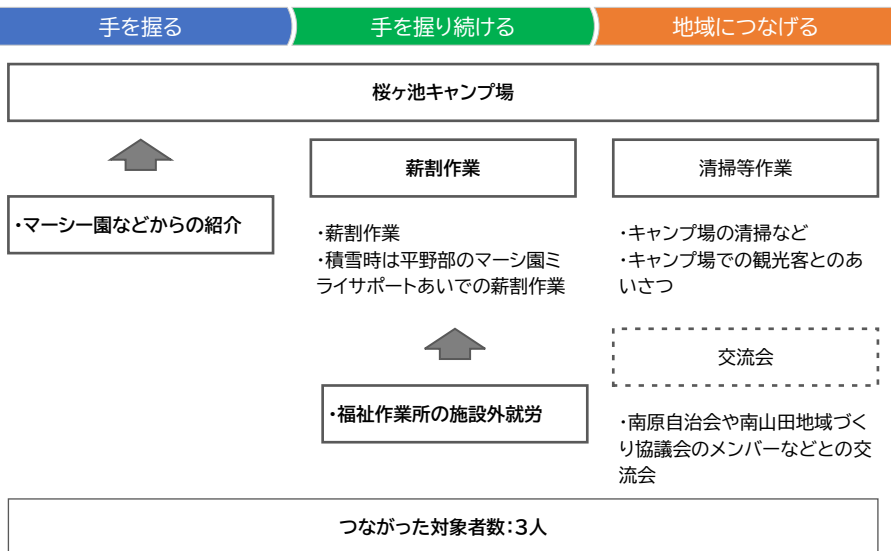
対象とする社会的孤立者：引きこもりの方、福祉作業所の利用者

引きこもりや精神障害の人々への支援不足や社会参加の困難さが問題とされています。現在、適切な事業所や支援者が不足しており、孤立者が相談や成功体験のできる場所も不足しています。この問題を解決するために、次の取り組みを行いました。1)まず、引きこもりや精神障害に関する講演会や関係機関との情報交換会を実施し、引きこもりや孤立状態にある人々の調査を行いました。2)その結果をもとに、孤立者を支援する組織を構築し、相談窓口を設けました。さらに、彼らを理解するためのアセスメントを行いました。3)また、気軽に立ち寄れる居場所をつくり、日中の活動への参加を促す取り組みを行いました。さらに、居場所では余暇活動だけでなく、就労体験の機会も提供しました。これらの取り組みを通じて、孤立者が社会参加や就労を通じた自己実現を達成することを目指し、引きこもりや精神障害者だけでなく、地域住民全体が元気になり、豊かな暮らしと幸福を感じる街づくりに貢献することを目指しています。

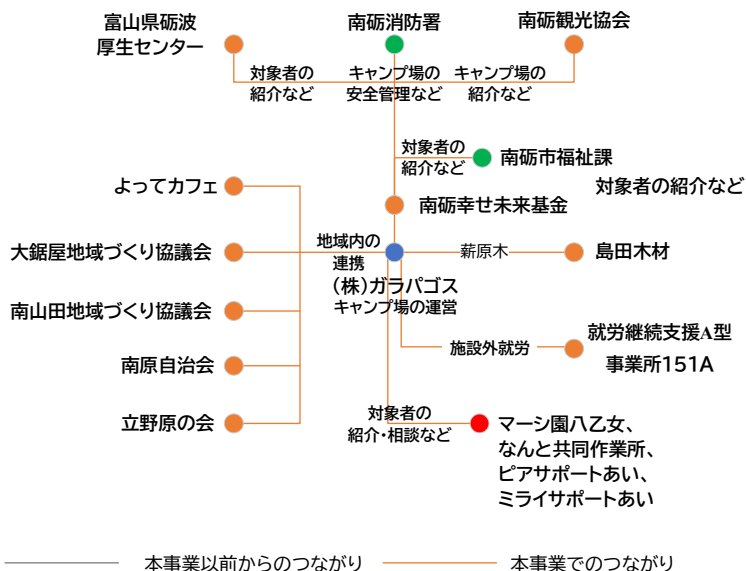


1. 引きこもり等
支援連携
担当者会議
2. 桜ヶ池
3. 薪割

■体制とつながった対象者の人数



■総働体制図

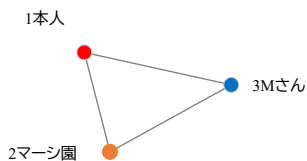


■対象者のつながり図

手を握る

ガラパゴスとつながる

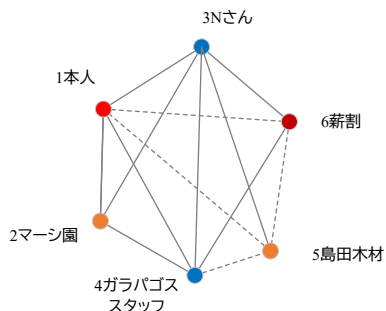
マーシ園の紹介で、本人とつながりました。



手を握り続ける

ミライサポートあいのスタッフや利用者につなげる

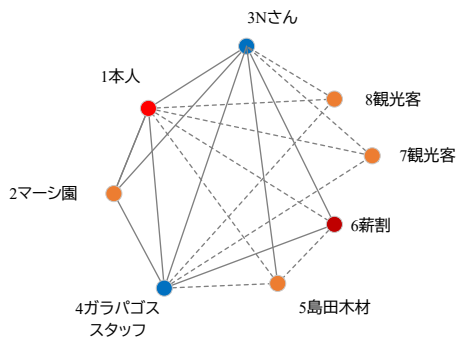
薪割に参加を促し、スタッフ、関係者、他の雇用者につなげました。



地域につなげる

キャンプ場での掃除等により地域につなげる

キャンプ場での掃除等を行い、自然に観光客や来訪者などへのあいさつ等を交わすことにより地域につなげました。



●:実行団体メンバーを示します

■対象者が変化した物語:穏やかな時間を過ごす!

私は集中力が低下し、注意を維持することが難しく、感情のコントロールも困難であり、怒りやイライラを表現するなどの性格的な特徴がありました。このため、他の人との円滑な関係を築くことが難しく、引きこもりがちな生活を送っていました。そんな中、担当の相談員から桜ヶ池キャンプ場で薪割作業を紹介されました。薪割作業はキャンプで使用するとき火のために薪を製造・販売する仕事でした。桜ヶ池の自然環境の中で行われるこの作業は、失敗が少なく、成果物が具体的に形になるため、楽しく取り組むことができました。最近では、キャンプ場の清掃も頼まれるようになりました。自然な雰囲気の中でキャンプ場のスタッフや利用者や挨拶を交わす機会が増え、穏やかな時間を過ごすことができるようになりました。

■成功した要因

- 当社は南砺市以外に本社を置いていたため、当初は地域とのつながりがありませんでした。しかし、マーシ園との連携や資金分配団体のプログラムオフィサーにより、地域団体や自治体などのつながり、対象者を支援する体制を構築できたこと。
- プログラムオフィサーの仲介で、薪原木を島田木材から安価に継続的に購入する契約を結ぶことができ、薪割事業を開始し継続することが可能となったこと。
- 桜ヶ池キャンプ場が冬場に多くの積雪があるため、薪割事業への通勤が困難な状況でした。そこで、平野部のマーシ園ミライサポートあいには薪わり機を設置し、通年で事業を行える体制を整備できたこと。
- マーシ園や南砺幸せ未来基金などの連携により、彼らが持つネットワークの中に参加することができ、南砺市の多くの市民・事業者に当社の取り組みを知ってもらうことができたこと。

■主な非資金的支援の内容

- マーシ園の関係者との意見交換を行い、その後、2021年5月以降は両実行団体との毎月の月次会議を通じて、対象者の情報共有や協力関係の構築の支援。
- 地元の南山田地域づくり協議会の会長や関係者、地元の南原自治会会長などつながりを築くための支援。
- 地元の知り合いの林業者を紹介し、安価で安定的に薪の原木を購入できるようにした支援。
- 桜ヶ池キャンプ場の管理棟の火災報知器に不備があり、消防からの認可を得るため、施設責任課の農政課に申し入れを行った支援。

■非資金的支援によりスタッフが向上したスキル

- マーシ園と関係者との意見交換や両実行団体との月次会議を通じて、引きこもりや障がい福祉のことの理解の深化により専門スキルの向上。
- 地元の南山田地域づくり協議会や南原自治会との関係構築の支援を通じて、地域連携のスキルの向上。
- 桜ヶ池キャンプ場の火災報知器の問題解決に取り組み、施設責任課の農政課と協力したことから公的機関との連携スキルの向上。

■波及的・副次的効果

- 「ミライサポートあい」の薪割り作業の取り組みにより、今後は南砺市内の他の事業所でも同様の取り組みを広げる可能性が生まれたこと。

知の構造化

3つの小さなコミュニティ財団のコンソーシアムによる本事業の活動実績に基づいて、見えたり、理解できたり、達成できたことを「知の構造化」しました。

知の構造化 01 プログラムオフィサーの学び合いによる効果

■活動実績

プログラムオフィサーは、以下の活動を通じて、コンソーシアムを生かした学び合いを実施しました。

- ・月1度の運営会議における進捗報告、課題共有、解決策検討
- ・各市の実行団体の現地視察による現場感の共有
- ・幹事団体の事前・中間・事後評価の実行団体ヒアリング同行やディスカッション
- ・実行団体の学び合いへの参加
- ・事務局の週1回のランチミーティング



1. 学び合い
大鋸屋の現場
2022年7月18日
2. 事後評価
ヒアリング@はく
2023年4月24日

■効果

これらの学び合いの活動により、プログラムオフィサーは以下のような効果を得ました。

・事業の各段階における活動内容の理解と深化

運営会議における報告やディスカッションを通じて、事業の各段階におけるプログラムオフィサーの活動内容に対する深い理解が得られました。

・知識や情報の共有と拡充

進捗報告や現地視察を通じて、各実行団体の状況や活動内容だけでなく、現場の臨場感や関係性についても理解を深めることができました。これにより、新たな知識や情報を共有し、自身の専門知識を拡充しました。

・問題解決スキルの向上

進捗報告や課題共有、解決策検討のディスカッションを通じて問題解決能力を高め、他のメンバーや実行団体との意見交換やアイデア共有により、より効果的な支援策や改善策を導き出すスキルを獲得しました。また、学び合いの場や情報交換の活動を通じて個人の成長と能力向上を達成し、創造性や問題解決能力も発展させました。

・チームワークの形成と相互支援

学び合いの活動は、プログラムオフィサー同士の協力とチームワークを促進しました。定期的な会議やミーティングにより、メンバー間のコミュニケーションや意思疎通が円滑化しました。これにより、チームの一体感や信頼関係が築かれ、相互の支援や協力関係を構築することができました。結果として、助成プログラムの実施においてより効果的なチーム動作が実現されました。

・今後の取り組むべき内容の明確化

実行団体ヒアリングや学び合いの場への参加により、プログラムオフィサーは自身の地域でまだ取り組んでいない社会的孤立者への支援活動の事例を知ることができました。これにより、今後取り組むべき活動内容を明確化することができました。

知の構造化 02 実行団体の学び合いによる効果

■活動実績

コンソーシアムの特徴を生かし、市域を超えた実行団体の学び合いを3回行いました。同じテーマの実行団体が市域にはほとんど存在しなかったため、テーマを設定しました。

・第1回：引きこもり等の応援について

実施日：2021年10月30日

参加実行団体：TeamNorishiro／マーシ園／ガラパゴス／みかた麴社

内容：働く応援(薪・着火材づくりによる中間就労)視察／暮らしの応援(空き家を活用した誰かの場所)視察／意見交換

・第2回：産前産後の母子の応援について

実施日：2022年5月27日

参加実行団体：産前産後ケアはぐ／お産子の家※／ぐるり※

内容：共同助産所 お産子の家視察／ETWAS NEUES視察／産前産後ケアはぐ活動紹介／意見交換

・第3回：新規就農者などの移住者の応援について

実施日：2022年7月18-19日

参加実行団体：なんとおせえ会移住応援団／愛のまちエコ倶楽部／大鋸屋営農組合※

内容：大鋸屋現地視察／移住者の住まい見学／各団体活動紹介／意見交換

※2021年度休眠草の根支援事業の採択団体



働く応援の視察
薪づくりの現場
2021年10月30日

■効果

助成を受ける実行団体間の学び合いには、以下の効果がありました。

・共感とモチベーションの向上

学び合いの中で、活動や直面している困難や課題を共有することで共感の関係が生まれました。また、同じテーマの団体の活動を知ることで、自身の取り組みへの動機やモチベーションが高まりました。

・知識やノウハウの共有

実行団体同士が情報を共有し、経験や知識を活用することができました。これにより、各団体は他の団体の成功や失敗から学び、自身の取り組みを改善することができました。

・活動の道筋の再確認

異なる実行団体間で共通の課題テーマがありましたが、それぞれの団体が独自の要素や取り入れたい部分を持っていることが明確になりました。これにより、自身の理想や活動に対する精査の機会となり、重要な節目や進捗状況を再確認することができました。

・ネットワーキングの機会

学び合いの場を提供することで、実行団体同士のネットワーキングの機会が生まれました。このような交流により、協力関係が築かれました。

知の構造化 03 プログラムオフィサーの活動内容

プログラムオフィサーとは、いま地域が抱える複雑で多様な問題に対して、活動する人たちの想いとりソースをつなぎ、課題解決をサポートする専門家です。

本事業の活動実績に基づいて、プログラムオフィサーがローカルアクションをサポートするための活動内容を構造化します。

STEP 1 発掘 資金分配団体の応募申請前

日常の活動の中で地域の課題を把握し、応募案件を作成します。

・日常の活動の中から案件の芽を見つけ出す

地域や社会のために活動している多くの人々が存在し、地域の現在の課題や必要な取り組みについては、実践者が最も詳しく知っています。そのため、日常の活動の中で団体との対話を通じて、支援すべき社会課題や実施団体などの案件の芽を見つけ出します。また、実践者がまだ気づいていない地域の課題を意識し、実践者を見つけて育成する機会づくりも重要です。

・実施団体との対話を通じて現場を理解し、地域における支援の動機や理由を明確にする

案件の萌芽が見つかったら、関連する実施団体と丁寧に対話し、現場の状況を理解することが重要です。このような活動を行う人々の思いや情熱に触れることで、地域における支援の動機や理由が明確になります。

・可能性を基に案件を具体化する

こうした方法によって、自ら地域に入り込み課題を把握し、解決に向けた可能性がある団体が見つかり、地域で支援したいという動機や理由が明確になった段階で、申請書の作成に取り組みます。助成金は手段に過ぎず、可能性を基にして具体的な案件を形成します。

STEP 2 企画 実行団体の公募期間中

実行団体の申請書の作成を支援しながら、想い、覚悟、力量を見極めます。

・申請書の作成支援により、想いを表現できるようサポートする

地域を変革する実行力を持っていないながらも、申請書の表現が苦手な実施団体も存在します。申請書の表現が不十分なために、そのような団体が不採択されることは、地域にとって大きな損失となります。そのため、申請を希望する団体に対して、想いが最大限に表現されるような申請書の作成支援を行います。

・活動支援に加え、地域変革のための活動を支援することの理解を促す

公募説明会などを通じて、実現したい地域の未来像を伝え、実施団体の活動を支援するだけでなく、未来像を実現するために共に地域を変革させる活動を支援することを理解していただきます。

・社会課題→活動→成果目標→将来像を明確にする

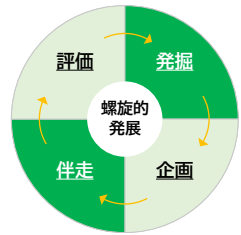
ロジックモデルは、社会課題に対して活動を行い、その活動がどのような成果をもたらし、実現したい地域の未来像を明確にするためのツールです。ロジックモデルの作成支援を通じて、社会課題→活動→成果目標→将来像を明確化します。

・実施団体の想い、覚悟、力量を見極める

申請書や審査会だけでは、実施団体の全体像を完全に把握することはできません。申請書の作成支援を通じて、実施団体の成果目標を達成するための想いや覚悟、活動を推進していく力量を育めるかを見極めていきます。

・不採択された団体とも連携を続ける

不採択された団体も、今後もまちづくりの担い手として重要です。そのため、不採択された団体にも理由を説明し、今後の資金調達などのような支援を行うかについて意見交換し、関わり続けるようにします。



STEP 3 伴走 事業実施中

実行団体の状況に合わせて、必要な支援の形を考えながら伴走する。

・現場の雰囲気を感じながら、状況に合わせた伴走方法を組み合わせる

伴走の方法は実行団体によって異なります。対面の面談やSNSなどを通じて日常的なコミュニケーションを行い、現場の雰囲気を感じ取りながら団体の状況を把握し、適切な伴走方法を検討します。様々な手法を組み合わせながら伴走を行います。

・課題解決に必要なリソースを常に考慮する

実行団体からの相談に対し、その課題を解決するためにどのような地域資源を活用すべきかを常に考慮します。意見交換を通じて、課題解決に必要な人や資源を見つけることがあります。すぐに解決策が見つからなくても、様々な人と協力して相談を重ねる中で解決策が浮かぶこともあります。地域の人的資本や社会関係資本などの有効なリソースを考慮することは、プログラムオフィサーのスキルの一環です。

・総働体制づくりを通じて、地域の生態系を育む

複雑化し多様化している地域の課題を解決するには、単独の実行団体だけでは限界があります。そのため、地域全体の協力がが必要です。私たちは資金分配団体のネットワークを活用し、行政や地域団体・個人と連携し、地域の課題解決のための総働体制づくりを支援します。この取り組みによって人と人を結びつけ、地域が自己進化する生態系を育てていきます。

・常に設定した将来像を共有する

伴走する際に重要なのは、実行団体と共有した地域の将来像です。事業計画に基づいて伴走支援を行います。予想外の事態や進行の遅れが発生することもあります。そのような場合には、関係者と協力して目指すべき地域の将来像を再確認し、必要に応じて活動の見直しも支援します。

STEP 4 評価 事業完了時点

活動を振り返り、成果評価と新たな課題を可視化する。

・事業の総括と今後の活動改善を明確にする

事業完了時点では、活動を振り返り、事業計画で定めたアウトプットやアウトカムの指標に基づいて、実績値を整理し、目標達成の状況を評価します。関係者との意見交換を通じて、計画通りに成果を上げた要因や課題、波及効果などを評価し、今後の活動改善点を明確にします。

・新たな社会課題を発見する

特に事業を進める中で浮かび上がった新たな社会課題を整理し、次のプロジェクトの可能性を可視化します。事業を通じて得た知見や問題意識を基に、新たな案件や取り組むべき領域を発見し、次のステップに繋げていきます。

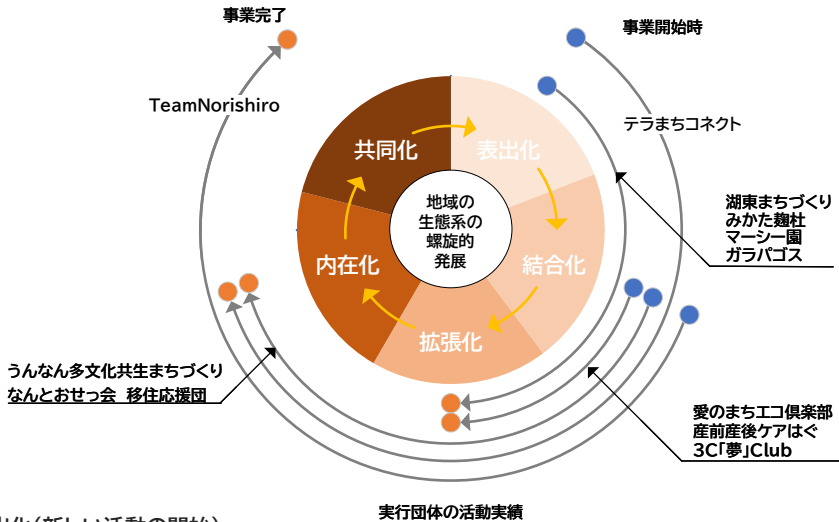
・学びと共有を促進する

成果報告会や事業報告書などで事後評価の過程で得られた学びやノウハウを共有することが重要です。成果評価や新たな課題の可視化を通じて得た知識や経験を、関係者や他の実行団体と共有し、より効果的な社会貢献活動へのフィードバックを行います。

知の構造化 04 地域総働体制の構築のプロセス

社会的孤立者を地域につなげる実行団体の活動実績に基づき、地域総働体制を構築するプロセスを、SECIモデルをベースに整理しました。このプロセスは、表出化、結合化、拡張化、内在化、共同化という5つの段階を繰り返すことで、組織的なつながり(形式知)と個人的なつながり(暗黙知)をより強固にし、地域の生態系を次第に拡大させ、より豊かにしていきます。

※SECIモデルは、個人が蓄積した知識や経験(暗黙知)を組織全体で共有し、形式的な知識として結実させるための知識創造プロセスです。



・表出化(新しい活動の開始)

表出化は、社会的な課題や孤立者に気づいた人々が、その課題を解決する意欲を持ち、言葉に表現し、個人的なつながりを通じて参加メンバーを募り、課題と解決策を共有して新しい活動を開始するプロセスです。

・結合化(既存の専門的な活動団体との連携)

結合化は、既存の課題解決に取り組む専門的な活動団体と連携し、役割分担を行いながら社会的孤立者を応援する体制を構築するプロセスです。他の団体の知識、経験、ノウハウ、制度などを活用し連携しながら、社会的な課題の解決に取り組めます。

・拡張化(周辺団体との連携)

拡張化は、地域内でまだ活用できていない地域の人的資源や社会的な関係資本と連携し、社会的孤立者を応援する体制を構築するプロセスです。専門家の活動を補完する地域の支え合い機能や人脈を活かし、社会的孤立者の状況に合わせたオーダーメイドの応援を行います。

・内在化(個人的なつながりの構築)

内在化は、組織的なつながりから個人的なつながりへの移行プロセスです。個々のメンバーは、組織の立場や担当を超えて、善意と共感に基づいて全体的かつ包括的な人間関係を築いていきます。これにより、組織の役割が変わっても、個々のメンバーは自身の能力や人脈に応じた役割を継続的に果たすことができます。

・共同化(個人的なつながりの共有)

共同化は、現場で形成された個人間のつながりを次世代に引き継ぐプロセスです。共同化の段階では、組織化されたマニュアルや制度によるノウハウの伝承は難しいです。そのため、現場や社会的孤立者を中心に据えた対話や言葉化などを通じて、ここで形成された貴重な人脈やつながりづくりの暗黙知を共有します。

インプット

本事業を実施するためにインプットされた主な経費、人材は次のとおりです。

経費

単位:円

団体名	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	合計	うち助成金	
実行団体	一般社団法人TeamNorishiro	510,000	9,796,010	2,050,914	-	12,356,924	12,000,000
	NPO法人愛のまちエコ倶楽部	-	10,142,561	3,381,639	-	13,524,200	12,900,000
	一般社団法人湖東まちづくり	-	5,262,556	2,117,444	-	7,380,000	7,000,000
	産前産後ケアはぐ	-	5,560,235	2,216,719	-	7,776,954	7,433,084
	一般社団法人みかた麴社	-	5,436,545	5,602,953	-	11,039,498	10,080,000
	うんなん多文化共生まちづくり協議会	-	3,027,192	3,335,673	-	6,362,865	5,926,291
	3C「夢」Club実行委員会	-	3,720,315	5,091,135	-	8,811,450	8,037,372
	なんとおせっ会 移住応援団	-	2,533,979	3,386,377	-	5,920,356	5,036,032
	テラまちコネクト	-	3,648,570	4,101,916	-	7,750,486	6,754,899
	社会福祉法人マーシ園	-	789,573	4,796,391	-	5,585,964	4,857,533
	株式会社ガラパゴス	-	2,201,904	8,363,506	-	10,565,410	7,120,192
	資金分配団体	東近江三方よし基金	724,120	5,777,562	4,161,550	6,256,768	16,920,000
うんなんコミュニティ財団		1,304,708	4,137,533	3,635,689	1,594,070	10,672,000	10,422,000
南砺幸せ未来基金		-	2,407,533	2,078,919	7,428,548	11,915,000	11,665,000
合計	2,538,828	64,442,068	54,320,825	15,279,386	136,581,107	125,902,403	

参考資料:2023.6.17時点の月次精算報告

うち助成金:実行団体:確定助成金、資金分配団体:確定前

資金分配団体合計:資金計画値(管理的経費+PO関連経費+資金分配団体評価関連経費+管理的経費自己資金)

資金分配団体2023年度:合計-(2020~2022年度)

人材

プログラムオフィサー

東近江三方よし基金:山口美知子、西村俊昭

うんなんコミュニティ財団:村上尚実、小俣健三郎、平井佑佳、坂本逸志

南砺幸せ未来基金:南真司、能登貴史

一般財団法人日本民間公益活動連携機構:安達空

事務局

東近江三方よし基金:山口美知子

うんなんコミュニティ財団:村上尚実

南砺幸せ未来基金:藤田智晃、浦井啓子



2020-2023年度 休眠預金活用草の根活動支援
ローカルな総働で孤立した人と地域をつなぐ
事業報告書(2023.7)

公益財団法人東近江三方よし基金

公益財団法人うんなんコミュニティ財団

公益財団法人南砺幸せ未来基金

発行・問合せ: 幹事団体  東近江三方よし基金
〒527-0012

東近江市八日市本町9-19

TEL: 080-2541-9990

Email: 3poyoshi.kikin@gmail.com

HP: <https://3poyoshi.com/>